

ありません、實際。

其の人だつて、又然うです——あの可憐い面のために氣絶をした。私が行かないと其のまゝ、一命が終つたかも知れない、と言へば、貴下に取つて面倒になりますけれども、唯夢のやうに思つたと、彼方で言ひます——それなり茫と成つて、まあ、すやくと寐入つたも同じ事だ。たとひ門口に倒れて居たつて、莖が枯れたと云ふんぢやなし、姿の萎んだだけなんです……露が降りれば、ひとりでにまた、恍惚と咲いて覺める、……殊に不思議な花なんですもの。自然の露が其の唇に点滴らなければ点滴らないで、其の襟の崩れから、ほんのりと花瓣が白んだやうな、其の人自身の乳房から、冷い甘いのを吸ひ上げて、人手は藉らないでも、活返るに疑ひない。

私は——膝へ、恚う抱き起して、其の顔を見た咄嗟にも、直ぐに然う考へました。——

こりや餘計な事をしたか。自分が此の人を介抱しようとするのは、眠つた花を、さあ、咲け、と人間の呼吸を吹掛けるも同一だと。……

で、懐中の寶丹でも出すか、じたばた水でも探してからなら、まだしもな處を、其の帯腰から裾が、私に起こされて、柔かに揺れたと思ふと、最う睫毛が震へて來た。絲のやうに目を開いたんですから、了つた！と尙ほ思つたんです——まるで、夕顔の封じ目を、不作法に指で解いたやうに。

はツとしながら、玉を抱いた逆上せ加減で、おゝ、山蟻が這つてるぞ、と眞白な咽喉の下を手で拂くと、何と、小さな黒子があつたんでせう。

逆に温かな血の通ふのが、指の尖へヒヤリとして、手がぶるゝとなつた、が、引込める間もありません。婦が其の私の手首を、恚う取ると……無意識のやうぢやありませんが、下の襟を片手で取つて、ぐいと胸さがりに脇へ引いて、搔合はせたので、災難にも、私の手は、馥郁ともの薫る、襟裏へ縫留められた。

さあ、言はないことか、花瓣の中へ迷込んで、蛇め、蛭いても拔出されぬ。

困窮と云ひますものは、……

黙つちや居られませんから、

(御免なさいよ。)

と、のつけから恐入つた。——其の場の成行きだつたんですな。——

「如何にも、」

と先達は、膝に兩手を重ねながら、目を据ゑるまで聞入るのである。

「黙つて居ます。が、恚う、水の底へ澄切つたと云ふ目を開いて、凝乎と膝を枕に、腕に後毛を掛けたまゝ、私を見詰める。眉が浮くやうに少し仰向いた形で、……抜けかゝつた櫛も落さず、動

きもしません。

黙つちや居られませんかから、

(気がついたんですか。失禮を)

また詫をする工合の悪さ。でも、矢張黙つて居ます。

(気分は何うなんです。此處に倒れて居なすつたんだが。)

これで分つたらう、放し給へ、早く擦抜けようと、もぢつくのが、婦の背を突いて揺るやうだから、慌てて又窘まりましたよ。何處を糸で結んで手足になつたか、女の身體が宛然綿で……」

十八

「綿で……重いことは膝が折れさう——尤も此の重いのは、あの昔話の、怪い者が負さると途中で挫げるほどに目貫がかゝるつて言ふ、そんなのぢや無い。そりや私にも分つて居ましたが、……」

あゝ、これは何故私が介抱したか、其の人は何うして居たか、そんな事なんぞ言つて居るのではまだるツこい。
(失禮しました、今何です、貴女の胸に蟻が這つて居たもんですから、)

つい拂つて上げよう、と觸つたんだ、と的切それがために、そんな様子で居るんだらう、と気が着いて、言譯をしましたかね。

黙つて居ます……些とも動かないで、私の顔を、其のまゝ見詰めてるぢやありませんか。」

と三造は先達の顔を瞻つて、
「ぢや、未だ気が遠く成つたまゝで、何も聞えんのかと思へば、……顔よりは、私が何か言ふ其の聲の方が、却つて其の人の瞳に映るやうな様子でせう。梔子の花で無いのは、一目見てもはじめから分つてます。

弱りました。汗が冷く、慄氣と寒い。息が發奮んで、身内が震ふ處から、取つたのを放してくれない指の先へ、ぱつと火がついたやうに、ト胸へ來たのは、やあ！ 慄うやつて生血を吸ひ取る

……」

「成程、成程、いづれ其の邊で、大概氣絶けて了ふのでござらう。」

と先達は合點する。

「轉倒しても氣は確で、そんなら、振切つても刎上つたかと言へば、また然うも爲得ない、此處へ、」

境は帯を壓へつつ、

「天女の顔の刺繍して、自分の腰から下は宛然羽衣の裾に成つてる姿でせう。退きも引きも成らんです。否、成らんのぢやない、爲得なかつたんです——お先達、
と何か急きながら言淀んで、

「話に聞いた人面瘡——其の瘡の顔が窈窕として居るので、接吻を……何です、其の花の唇を吸はうとした馬鹿ものがあつたとお思ひなさい。」

と云ふと、先達は落着いた面色で、

「人面瘡、は、あ、」

然も知己のやうな言ひぶり、

「はあ、人面瘡、成程、其の面が天人のやうに美しい。芙蓉の毗、丹花の唇——でござつたかな、……といたして見ると……お待ちなさい、愛着の念が起つて、花の唇を……ふん、」

と仰向いて目を瞑つたが、半眼に成つて、傾きざまに膝を密と打ち、

「津々として玉とした、る甘露の液と思ふのが、實は膿汁といたした處で、病人の迷ふのを、強ち白痴とは申されん、——む、然やうなお心持でありましたか。」

眞顔で言はれると、恥ぢたる色して、

「否、心持と言ふよりも、美人を膝に抱いたなり、次第々に化石でもしさうな、身動きのなら

ん其の形が然うだつたんです。……

段々孤家の軒が暗くなつて、鐵板で張つたやうな廂が、上から壓伏せるかと思はれます……其のま、地獄の底へ落ちて行くかと、心も消々となりながら、あ、して見ると、坂下で手を掉つた氣高い女性は、我らがための佛であつた。——

此の難を知つて、留められたを、推して上つたはまだしも、爰に魔物の倒れたのを見た時、これを其の犠牲などと言ふ不心得。

と俯向いて、熟と目を睡ると……歴々と、坂下に居た其の婦の姿、——羅の衣紋の正しい、水の垂れさうな圓髻に、櫛のてら〜とあるのが目前へ。——

驚いた、が、消えません。何時の間にか暮れかゝる、海の風ぎたやうな緑の草の上へ、渚の浪のすら〜とある靄を、爪さきの白う見ゆるまで、浅く踏んで、何うです、つい其處へ来て、其が私の目の前に立つてゐるぢやありませんか。私を救ふためか。

と思ふと、何うして、これも敵方の女將軍。」

「女將軍？え、山賊の巢窟かな。」

と山伏はきよとんとする。

「後で聞きますと、其が山へ来る約束の日だったので、私の膝に居る女が、心待ちに古家の門口まで出た處へ、貴下が、例の異形で御通行に成つたのださうです。」

其の圓鬚に結つた姉の方は、竹の橋から上つたのだと言ひました。つい一條路の、あの上りを、時刻も大抵同じくする、貴下は途中でお逢ひになりはしませんでしたか。」

先達は怪訝な顔して、

「然れば、……處で、其の婆さんは何うしましたな、坂下に立つたのを御覽になつた時は、傍について居たと云ふお話續きの、と却つてたづねる。」

「それは峠までは来ませんでした。風呂敷包みがあつたので、途中見懸けたのを、頼んで、其處まで持たして来たのださうで。……矢張其の婆さんは、路傍に二人で立つて居た一人らしく思はれます。其の居た處は、貴下にお目にかゝりました、あの繩張をした處、……」

「然やう。」

「彼處よりは、ずつと麓の方です。」

「すると、其のどちらかは分りませんが、貴邊に分れて下山の途中で、婆さん一人にだけは逢ひました。成程——承れば、何か手に包んだものを持つて居た様子で——大方其の從伴をして登つた方のでありませうな。」

それにしては、お話し其の圓鬚に結つた婦人に、一條路出會はねばならん筈、……何か、崖の裏、立樹の蔭へでも姿を隠しましたかな。いづれ其れ人目を忍ぶと云ふ條で、

「屹と然うでせう。金澤から汽車で来たんださうですから。」

先達は目を睜つて、

「金澤から、」

「ですから汽車へ行らつしやる、貴下と逢違ふ筈はありません。」

「旅をかけて働きますかな。」

「え、」

「いや、盗賊も便利に成つた。汽車に乗つて横行ぢや。俱利伽羅峠に立籠つて——御時節から怪しからん……いづれ其の風呂敷包みも、たんまりいたした金目のものでございませうで。」

黙つた三造は、しばらくして、

「お先達。」

「はい、」

と澄ました風で居る。

「風呂敷の中は、綺麗な蒔絵の重箱でしたよ。」

「何處のか、什物、」

「否、其の婦人の臺所の。」

「はてな、」

「中に入つたのは鮎の鮨でした。」

「鮎の鮨とは、」

「莊河の名産ですつて、」

先達は啞然として、

「何うも成らん。こりや眉毛に唾ぢや。貴邊も一ツ穴の貉ではないか。怪物かと思へば美人で、人面瘡で天人ぢや、地獄、極樂、圓鬚で、山賊か、と思へば重箱。……寶物が鮎の鮨で、莊河の名物と成つた。……待たつせえ、腰を圓く然う坐られた體裁も、森の中だけ狸に見える。何と、此の圍爐裏の灰に、手形を一つお壓しなさい、ちよぼりと落雁の形でござらう。」

「怪しからん、」

と笑つて、氣競つて、

「誰も山賊の棲家だとも、萬引の隠場所だとも言はないのに、貴下が間違へたんではありませんか。え、お先達?」

「はい、」

と言つて、瞬きして、忽ち呵々と笑出した。

「はッはッはッ、慌てました、いや、大狼狽。又しても獅嚙を行つたて。凡て、此の心得ぢやに因つて、鬼の面を被ります。」

時にお茶が沸きました。——したが鮎の鮨とは好もしい、貴下も御賞翫なされたかな。」

二十

「承つた處では、籠から其の重詰を土産に持つて、右の婦人が登山されたものと見えますな——但し何うやら、貴邊が其の鮨を召ると、南蠻祕法の痺藥で、忽ち前後不覺、と言つたやうな氣がして成りません。早く伺ひたい。鮨は如何で?」

其時境は煎茶に心を静めて居た。
「御馳走は……然も、あ、何とか云ふ、一寸屠蘇の香のする青い色の酒に添へて——其の時は、

寛の水に埃も流して、袖の長い、振の開いた、柔かな浴衣に着換へなどして、舌鼓を打ちましたよ。

「いづれお酌で、いや、承つても、はつと酔ふ。」

と日に焼けた額を押撫でながら、山伏は破顔する。

「しかし、其の倒れて居た婦人ですが、」

「はあ、其がお酌を参つたか。」

「否、世話をしてくれましたのは、年上の方ですよ。其の倒れて居た女は——ですわね。」

「然う、然う、又これは面被りぢや。何うも成らん、我ながら慌てて不可ん。成程、それは未だ一言も口を利かずに、貴邊の膝に抱かれて居たて。何を恚う先走るぞ。が、お話の不思議さ、気が氣でないで急立ちますよ、貴邊は餘り落着いておいでなさる。」

「けれども、私だつて、まるで夢を見たやうなんですから、霧の中を探るやうに、恚う前後を辿り廻りしないと、茫として掴へられなくなるんですよ。……お話もお話だが、御相談なんですから、能くお考へなすつて下さい。」

——其の圓鬚の、盛装した、貴婦人と云ふ姿のが、さあ、私たちの前へ立つたでせう。——
膝を枕にしたのが、倒れながら、其を見た……と思つて下さい。

手を放すと、其まゝ、半分背を起した。——兩膝を細りと内端に屈めながら、忘れたらしく投げた裾を、すつと掻込んで、草へ横坐りに成ると、今までの様子とは、がらりと變つて、活々した、清い調子で、

(姉さん、此の方を留めて下さい、歸しちや厭よ。)

と言ふが疾いか、すつと、戸口の土間へ、青い影がちら／＼して、奥深く消え込んだ。

私は呆氣に取られた。

すると、姉さんと言はれた、其の貴婦人が、緊つた口許で、黙つて、唯一寸會釋をする、……これが貴下、其の意味は分らぬけれども、峠の方へ行くな、と言つて……手で教へた婦人でせう。何にも言はないだけ尙ほ氣がさす。

(え、實は……)

と前刻からの様子を饒舌つて、序に疑を解かうとしたが、不可ません。

(あ、)

それ覗くまでもなく、立つたまゝで、……今暗がりへ入つた、も一人の後を軒下に恚う透しなから、
(暫時何うぞ。)

坂を上つて、アノ薄原を潛るのに、見得もなく引提げて居た、——重箱の——其の紫包を白
い手で、羅の袖へ抱へ直して、片手を半開きの扉へかける、と嚴重に出來たの、何の。大巖の一
枚戸のやうな奴が又恐しく迂りが良くつて、發奮みか、つて、がらん、からん、からん、山鳴り震動、カ
ーンと笈を返すんです。怯乎としました。
爾時です。

(何處へも去らしつちや不可ませんよ。)

と振り返りざまに莞爾、美しいだけに其の凄さと云つたら。高い敷居に棲も躡さず、裾が浮いて、
是もするりと、あとは御存じの、あの奥深い、裏口まで行抜けの、一條の長い土間が、門形角形
に、縦に眞暗な穴で。」

と言つた、此の邊家の構は、件の長い土間に添うて、一側に座敷を並べ、鍵の手に鍵屋の店が
一昔以前あつた、片側はづらりと板戸で、外は直ちに千仞の俱利伽羅谷、九十九谷の一ツに臨ん
で、雪の備へ嚴重に、土の廊下が通ふのである。

二十一

「今の一言に釘を刺されて、私は遁ることも出來なくなつた、……尤も驅出すにした處で、差當

り其處等雲を踏む心持、馬場も草もふはくらしいに、足もぐらくと成つて居て、他愛があり
ません。止むことを得ず、暮れかゝる峰の、莫大な母衣を背負つて、深い穴の氣がする、其の土
間の奥を覗いて居ました。……冷たい大戸の端へ手を掛けて、目ばかり出して……

其の时分には、當人大童で、帽子も持物も轉げ出して草隠れ、で足許が暗くなつた。

遙か突當り——崖を左へ避けた離れ座敷、確か一字別に成つて根太の高いのがありました、
……其處の障子が、薄い色硝子を嵌めたやうに、ぼうと恚う鶏卵色に成つた、灯を點けたものらし
い。

其の障子で、姿を仕切つて、高縁から腰を下して、裾を踏落した……と思ふ態度で、手を伸し
て、私においでくをする。其が、白のだけちらくする、する度に、

(え、え、)

と自分で言ふのが、口へ出ないで、胸へばかり込上げる——其の胸を一すづ、戸擦れに土間へ
向けて斜違ひに糺出すんですがね、何うして、掴まつた手は、段々堅く板戸へ喰入るばかりに成
つて、挺でも足が動きません。

又ちらりと招く。

招かれても入れないから、然うやつて招くを見るのが、心苦しく成つて來たので、顔を引込

まして、門へ身體を横づけに、腕組をして棒立ち——で、熟と目を睡つて俯向いて居ました。此の體が、稀代に人間と云ふものは、激しい中にも、のんきな事を思ひます。同じ何でも、これが、もし麓だと、頬被をして、礫をトンと合圖をする、カタ／＼と……忍足の飛石つたひで……

(入らつしやいな。)

と不意に鼻の前で聲がしました。いや、其の、もの越の婀娜に碎けたのよりか、此方は腰を抜かないばかり。

(はッあ。)

と言ふ。

(さあ、何うぞ。)

と何にも思はない調子でしたが、板戸を劃に、横顔で、恚う言ふ時、ぐつと引入れるやうに其の瞳が動いたんです。

「これは、どちらの御婦人で、」

と先達は、湯を注しかけた土瓶を置く。

「其を見分けるほど、其の場合落着いては居られませんでした。」

敷居を跨ぐ時、一つ躓いて、とつぱぐつた直傍に、婦人が立つてたので、土間は廣くつても袖が擦れて、

(これは。)

と云ふと……

(お危うございます、お氣をつけ下さいまし。)

(何うもついで馴れませんので、)

と言ひましたがね、考へると變な挨拶。誰がこんな處を歩行馴れた奴がありますか。……外から見える縁側の兩戸らしいのは、これなんでせう、つツと裏庭へ出抜けるまで、心積り十八九枚……然やう二十枚の上もありましたらうか、中ほどが一ヶ所、開いて居ました。——其處から土間が廣くなる、左側が縁で、座敷の方へ折曲つて、續いて、三ツばかり横に小座敷が並んで居ます。心覚えが、其の折曲の處まで、店口から掛けて、以前、上下の草鞋穿きが休んだ處で、それから先は車を下りた上客が、毛氈の上へあがつた場處です。

餘計なことを言ふやうですが、後の都合がありますから、此の屋造の様子を聞いて下さい。

で座敷々々には、づらり板縁が續いて居るのが薄明りで見えました。其は戶外からも見える……崖へ向けて、雨戸を開けた處があつたからです。

が、丁ど土間の廣くなつた處で、同じ事なら最つと手前を開けて置いてくれれば可い……入口
しばらくの間、おまけに狭い處が、隧道でせう。……處へ、おどつてゐるから、ばたくと其處
等へ當る。——黙つて手を曳いたではありませんか。」

二十二

「對手は悠々としたもので、

(蜘蛛の巣が酷いのでございますよ。)

か何かで、時々歩行きながら、扇子……らしい、風を切つてひらりとするのが、怪しい鳥の羽
搏つ鹽梅。

是で當りはつきました。手を曳いてるのは貴婦人の方らしい、故々扇子を持參で迎ひに出よう
とは思はれませんか。

果して、然うでした。兩戸の開けてある、廣土間の處で、圓髻が古い柱の艶に映つた。外は八
重葎で、つツと崖です。崖にはむら／＼と霽が立つて、廂合から星が、……否、目の光り、敷居
の上へ頬杖を支いて、臺が覗いて居さうで。婦人が又蒼黄色に成りはしないか、と密と横目で
見ましたがね。襲を透いた空色の緞の色ばかり、すつきりして、黄昏の羅は宛然幻。然う云ふ自

分はと云ふと、まるで裾から煙のやうです。途端に横手の縁を、すつと通つた人氣勢がある。あ
あ、白脛が、と目に映る、と最う暗い處へ入つた。

向うの、離座敷の障子の棧が、ぼんやりと風のない燈火に描かれる。——其處へ行く背戸は、
淺茅生で、はらくと足の甲へ露が落ちた。

(さあ、此方へ。)

此處で手を離して、沓脱の石に熊笹の生え被つた傍へ、自分を開いて教へました。障子は兩方
へ開けてあつた。此處の沓脱を踏みながら、小手招をしたのでせう。

(上りましても差支へはございませんか。)

と其の期に及んで、まだ煮切らない事を私が言ふと、
(主人がお宿をいたします。お宅同様、何うぞお寛ぎ下さいまし。)

と先へ廻つて、恚う覗き込むやうにして褥を直した。四疊半で、腰を曲げて乗出すと、縁越に
手が届くんですね。

(兎も角御免を、)

高縁へ腰を蹴つて、爪尖下りに草鞋の足を、左の膝へ凭せ掛けると、目敏く貴婦人が氣を着け
て、

(あゝ、お濯ぎ遊ばしませうね。)

と二坪ばかりの浅茅生を斜に切つて、土間口を此方から、

(お綾さん——)

と呼びます。

(あゝ、もし〜。)

私は草鞋を解きながら、

(乾いた道で、此の足袋がごさいます。能く拂けば、何、汚れはしません。お手数は恐れ入りま
す、何うぞ御無用に……しかしお座敷へ上りますのに、)

と心着くと、無雑作で、

(否、最う御覽の通り、土間も同一でございますもの、そんな事なぞ、些ともお厭ひには及びま
せんの。)

と云ひかけて莞爾して、

(まあ、土間も同一だつて、お綾さんが聞いたら何ぼでも怒るでせう。……人様のお住居を、失
禮な。これでもね、大事なお客様に、と云つて自分の部屋を明渡したんでございますよ。)

如何にも、此の別亭が住居らしい。何處を見ても空屋同然な中に、此處ばかりは障子にも破れ

が見えず、門口に居た時も、戸を繰り開ける音も響かなかつた。

其處で、些と低聲になつて、

(貴女は……此家の……ではおあんなさいませんか。)

(は、私もお客ですよ。——不行届きでございますから、事に因りますと、お合宿を願ふかも知
れませんが、御迷惑でござんせうね。)

と一寸煽いだ、女扇子に口許を隠したものです。

「成程、何うも。」

山伏は髻だらけな頬を撫でる。

「私は、黙つて懷中を探しました。さあ、慌てたのは、手拭、蝦蟆口、皆無い。然までも思は
なかつたに、餘程顛動したらしい。門へ振落して來たでせう。事此處に及んで、旅費などを論ず
る場合か、其は覺悟しましたが、差當り困つたのは、お約束の足を拂く……」

「……様子で手拭が無いと見ると、スツと疊んで、扇を胸高な帯に挟んで、袂を引いたが長襦袢
の端と一所に、涼しい手巾を出したんですね。」

崖へ向いた後姿、すぐに浅茅生へ帯腰を細く曲げたと思ふと、さら／＼と水が聞えた。——臙
の清水と云ふんですか、草がくれで氣が着かなかつた、……寧ろ其より、此の貴婦人に神通があ
つて、露を集めた小流らしい。

(これで、貴下)

と渡す——算が其處にあるのであつたら、手数は掛けないでも洗つたものを、と思ひながら思
つたやうに口へは出ないで、黙りで、恐入つたんですが、柔く絹が擲んで、水色に足の透いた處
は、玉を踏んで洗ふやうで。

(さあ、お寄越しなさいまし。)

と美しい濡れた手を出す。

(一寸濯ぎませう。)

遮ると、叱るやうに、

(何ですね、跣足でお出なすつては、又汚れるではありませんか。)

で恐縮なのは、其のまゝで手を拭いて、

(後で洗ひますよ。)と丸げて落した。手巾は草の中。何の、後で洗ふまでには、蛇が来て抱くか、
山獮が接吻をしよう、と其處等を眊しましたが、おつかない怯乎。

(姉さん。)

(あ、)

(一寸。……)

土間口の優しい聲が、貴婦人を暗がりへ呼込んだ。が、二ツ三ツ何か言交はすと、両手に白い
ものを載せて出た——浴衣でした。

餘り人間離れがしますから、浅葱の麻の葉絞りで絹縮らしい扱帯は、平にあやまりましたが、
寝衣に着換へる、とあるから、思切つて素裸になつて引掛けたんです。女もので袖が長い——洗
つたばかりだからとは言はれたが、何處かヒヤ／＼と頸元から身に染む白粉の、時めく匂で。

又ぼうと成つて、居心が据らず、四畳半を燈火の前後、障子に凭懸ると、透間からふつと蛇の
臭が来さうで、驚いて摺つて出る。壁際に附着けば、上から蜘蛛がすつと下りさうで、天窓を窺
めて、ぐるりと居直る……真中に据ゑた座蒲團の友染模様が、桔梗があつて薄がすらく、地が
萌黄の薄い處、戸外の猿ヶ馬場そつくりと云ふのを、ぶつと避けて、ぐる／＼廻りは、早や我な
がら獨りでぐでんに酔つたやうで、座敷が揺れる、障子が動く、目が廻る。ぐたりと手を支く、
や、又ぐたりと手を支く。

これぢや成らん、と居坐居を直して、キチンとすると、掻合はせる浴衣を……潜つて觸る自分の身體が、何となく、するりと女性のやうで、ぶるツとして、つい、と腕を出して、つく／＼と視める始末。さ、恚うなると、愚にもつかぬ、此の長い袖の底には、針のやうな褐色の毛がうじや／＼……で、背中からむすつきはじめぬ。

尤も、今浴衣を持つて来て、

(私も一寸失禮をいたしますよ。)

で、貴婦人は母屋へ入つた——當分離座敷に一人の段取で。

其の内に、床の間へ目が着きますとね、掛地がない。柱の掛花活に、燈火には黒く見えた、鬼薊が投込んである。怪しからん好みでせう、……が其はまだ可い。傍の袋戸棚と板床の隅に附着けて、桐の中古の本箱が三箇、どれも揃つて、彼方向きに、蓋の方をぴたりと壁に押着けたんです。……

「はあ、」

とばかりで、山伏は膝の上で手を擴げた。

「昔修行者が、こんな孤家に、行暮れて、宿を借ると、承塵にかけた、槍一筋で、主人の由緒が分らうと云ふ處。本箱は、稍意を強うするに足ると思ふと、其の彼方向きの不開の蓋で、又し

ても眉を擧めずには居られませんのに、押並べて小机があつた。は可懐しいが、何うです——其の机の上に、何時の間に据ゑたか、私の其の、蝦蟇口と手拭が、丁と揃へて載せてあるのではありませんか、お先達。」
と境は居直る。

二十四

「背後は峰で、横は谷です。峰も、洞の窪んだ、頭がざんばらの栗の林で蔽ひ被さつて居ようと云ふんで、其こそ猿が宙返りでもしなければ上れさうにもなし、一方口は其の長土間でせう、——今更遁出さうツたつて隙があるんぢやなし、又遁げようと思つたのでもないが、さあ、静として居られないから、手近の障子をがたりと勢よく開けました。……何か命令をされたやうで、自分氣儘には、戸一枚も勝手を遣つては相成らんやうな氣がして居たのでありますけれども……すると貴下、何と其の横縁に、これも又吃驚だ。私の如何な麥藁帽から、洋傘、小さな手荷物ね。」

「やあ／＼、」

「それに、貴下が打棄つておいでなすつたと聞きました、其の金剛杖まで、一揃、驚いたもの

目には、何か面當らしく飾りつけたもののやうに置いてある。……」
山伏ぐんなりして、

「いや最う、凡慮の及ぶ處でござらん。黙つて承りませう、其處で？」

「處へ、母屋から登音が響いて来て、淺茅生を颯々、沓脚で、カタリと留むと、所在紛らし、谷の上の靄を視て縁に立つた、私の直ぐ背後で、衣摺れが、はらりとする。
小さな咳して、

(今に月が出ますと、些とは眺望になりますよ。)

と聲を掛けます。はて違ふぞ、と上から覗くやうに振向く。下に居て、其處へ、茶盆を直した處、俯向いた襟足が、すつきりと、髪濃いの、青貝摺の櫛が見めく、鬢も撫ついたらしいが、まだ、はらくする、帯はお太鼓にきちんと極まつた、小取廻しの姿の好き。よろけ縞の明石を透いて、肩から背がふつくりと白かつた——若い方の婦人なんです。

お馴染の貴婦人だとばかり、不意を喰つて、

(入らつしやい。)

と調子を外づして、馬鹿な言を、と思つたが、仕方なしに笑ひました。で、照隠しに勢よく煙草盆の前へ坐る……

(お邪魔に出ましてごさいます。)

莞爾して顔を上げた、其のはつちりしたのを稍細く、瞼をほんのりさして、片手ついたなりに顔を上げた美しさには、何も彼も忘れませんでした。

(飛でもない。)

と突のめるやうに巻煙草を火入に入れたが、トツチて居て吸ひつきますまい。

(お火が消えましたか知ら。)

と一寸駢した、火入は缺けて燻ぶつたのに、自然木を抉抜の煙草盆。就中灰吹の目覺しさは、……凡そ六貫目掛の筍ほどあつて、縁の刻々に成つた代物、先代の茶店が戸棚の隅に置かれたものらしい。

何の、火は赤々とあつて、白魚に花が散りさうでした。

漸と煙のやうな煙を吸つたが、何うやら吐掛けさうで恐縮で、開けた障子の方へ吹出したもんです。其の煙がふつと飛んで、裏の峰から一風颯と吹込む。

と胸をずらして、燈を片隅に押ししましたが、灯が映るか、目のふちの紅は薄らぐぬ。で、すつと吸ふやうに肩を細めて、

(お、涼しい。お月様の音ですかね、月の出には颯と云つて屹と峰から吹きますよ。あれ、御

覽なさいまし。)

と燈を背に、縁の端へ仰向いた顔で恍惚する。

(栗の林へ鵲の橋が懸りました。お月様はあれを渡つて出なさいます。いまに峰を離れますとね、谷の雲が晃々と、銀のやうな波に成つて、兎の飛ぶのが見えますよ。)

(殆ど仙境。)

と私は手を支いて摺つて出ました。

(まるで、人間界を離れて居ますね。)

……お先達、私の慫う言つたのは如何です。」

急に問はれて、山伏は、

「は、あ、」

と言ふ。

二十五

「驚駭に馴れて、幾干か度胸も出来たと見え、内々諷する心持もあつたんですね。

直ぐには答へないで、手捌きよく茶を注いで、

(粗いんですよ。)

と言ふ、自分の湯呑で、如何にも容の分と云つては茶碗一つ無いらしい。いや、粗い處か冥加至極。最一つ唐草の透し模様、硝子の水呑が俯向けに出て居て、

(お暑いんですから、冷水がお宜しいかも知れません。それだと直き其處に綺麗なのが湧いて居ますけれども、こんな時節には蛇が来て身體を冷すと申しますから。……)

此の様子では飲料で吐血をしさうにも思はれないから、一息に煽りました。實はげつそりと腹も空いて。

其を見ながら今の續きを、……

(眞個に心細いんですわ。最う、おつしやいます通り、こんな山の中で、幾日も何日もないやうですが、確か、あの十三四日の月夜ですのね、里では、お盆でせう。——其處等の谷の底の方に、何うやら、其らしい燈籠の灯が、昨夜幽に見えましたわ……ぼつちりよ。)

と蓮葉に云つたが、

(螢くらゐに。)

其のまゝで、故とでも無く、慫う崖へかけて俯向き加減に、雪の手を翳した時は、言ふばかりない品が備はつて、氣高い程に見えました。

(どんなに、可憐しうござんしたでせう。)

忽ち悄れて涙ぐむやうに、口許が引しまった。

見ると堪らなくなつて、

(其のかはり、又、里から眺めて、自然慙うやつてお縁側でも開いて居て、フト此の燈火が見え
ましたら、どんなにか神々しい、天上の御殿のやうに思はれませう。)

何故山住居をせらるゝ、と聞く間もなしに慰めたんです。

あどけなく頭を振つて、

(否、何の、何處か松の梢に消え残りました、寂しい高燈籠のやうに見えますよ。里のお墓には、
お隣りもお向うもありますけれど、此處には私唯一人。)

小指を反らして、爪尖を凝と見て、

(眞個に貴下、心細い。蓮の臺に乗つたつて一人切では寂しいんですのに、お剩に此處は地獄で
すもの。)

(地獄。)

と言つて聞返しましたがね、分別もなしに、扱はと思つた。それ、貴下の一件です。」

「鬼の面、鬼の面。」

と山伏は頭を搔く。

「處が違ひます。私もの切……だらうと思つて、

(貴女、唐突ですが、晝間變なものの姿を見て、それで、厭な、そんな忌はしい事をおつしやる
んぢやありませんか、屹と然うでせう。)

に極めてかゝつて、

(御心配はありません。あれは、麓の山伏が……)

ツて、此處で貴下の話をしました。

就ては、些と繕つて、まあ、穩かに、里で言ふ峠の風説——面と向つて居るんですから、然う
明白にも言へませんでした、でも峠を越すものの煩らふぐらるの事は言つた。で、承つた通
り、現に此の間も、これくと、向う鬮卷の豪傑が引轉かへつたなぞは、對手の急所だ、と思つ
て、饒舌つたには饒舌りましたが、……自若として居る。」

「自若として、」

「其は實に澄ましたものです。墓が出て颯の生血を吸つたと言つても、微笑んでばかり居るぢ
やありませんか。早く安心がしたくもあるし、此方は急つて、

(何故又こんな處にお一人で。)

と思ひ切つて胸を据ゑると、莞爾して、
 (だつて、山蟻の附着いた身體ですもの。)
 と肩をぶるくと震はして緊乎と抱いた、胸に夕顔の花が又ほのめく。……あゝ、魂と云ふものは、あんな色か、と婦に玉の緒を取つて扱かれたやうに、私がふらくとした時、
 (貴下、)
 と顔を上げて、凝と又見ました。」

二十六

「色めいた媚かしき、弱々と優しく、直ぐに男の腕へ入りさうに、怪しい翼を搔きめて誘込むと言つた形。情に堪へないで、其のまゝ抱緊めでもしようものなら、立處にぱつと羽搏きを打つ……忽ち蛇が寸断になるんだ。何の其の術を食ふものか、とぐつと落着いて張合つた氣で見れば、餘りしをらしいのが癩に障つた。
 が、其は自分勝手に、對手が色仕掛けにする……いや、してくれる……と思つた、此方が大の自惚……
 以つての外です。」

實は、涙を以て、あはれに、最惜しく、其の胸を抱いて様子を見るべき筈で。やがて又、物凄さ恐しさに、戦きく、其の膚を見ねばならんのでした。」

と語りかけて、何故か三造は歎息した。

山伏は茶盆を突退けて、釜の此方へ乗つて出て、

「自惚でない。承つた、其の様子、怪しからん嬌媚の體ぢや。然やうなことをいたいて、少い方の魂を蕩かすわ、ふん、ふん、」

と頻りに頷きながら、

「其處で其の、白い乳房でも露したでござるか。」

「否。」

「いづれ、鳩尾に鱗が三枚……」

黙つて三造は頭を掉る。

「全體蛇體でござるかかな。」

「否。」

郎女星
 「然らば一面の黒子かな、何にいたせ、其の膚を、其の場で以て……」
 「見ました、見ましたが、其は寝てからです。」

「寝て……からは尙ほ怪しからん。是は大變。」

と引摺んで膝去り出した、煙草入を押戻しさまに、たじくとなつて、摺下つて、

「はッはッ、其まで承つては、山伏も恐入る。あの其の羅を透くと聞きましただけでも美しさが思ひ遣られる。寝てから膚を見たは慄然とする……最う目前へちらつく、獨の時なら鐸を振つて怨敵退散と念ずる處ぢや。」

「聞きやうが悪い、お先達。私が一ツ部屋にでも臥つたやうに、」

「違ひますか。」

「飛んだ事を！」

と強く言つた。

「はてな。」

「婦たちは母屋に寝て、私は淺茅生の背戸を離れた、其の座敷に泊つたんです。別々にも、何にも、まるで長土間が半町あります。」

「又それで、何うして貴邊は？」

「然うです……お聞きからうが、覗いたんです。」

「お覗きなすつた？何處から。」

「長土間を傳つて行つて、母屋の一室を闖にした、其の二人の蚊帳を、……」

と言ふのが——一人で離座敷に寝たには寝たが、何うしても静と枕をして居る事が出来なくなつて了つたんですね。」

「山伏でも寝憎いで、御無理はない、迷ひぢやな。」

「迷……迷ひは迷ひでせうが、色の、戀のと言ふのぢやありません。これは言譯でも何でもない、色戀ならまだしもですが、眞個は、何とも氣味の悪い恐しい事が出来たんです。」

「はあ、蚊帳を抱く大入道、夜中に山霧が這込んでも、目をまはすほど怯かされる、よくある奴ぢや。」

「否、蚊帳は釣らないで臥りました。——母屋の方は然うも行かんが、清水があつて、風通しの可い所爲か、離座敷には蚊は居ません。で、些と薄ら寒いくらるだから——つて……敷くの二枚と小搔卷。どれも藍縞の郡内絹、勿論お綾さん、と言ひました、少い人の夜のもの……其かはり蚊帳は差上げません。——」

（些と美しい唇に、分けてお遣なさいまし。……殿方の血は、殿方ばかりのものぢやありませんよ。）

と凄いやうな串戯を、是は貴婦人の方が言つて。——辭退したが肯かないで、床の間の傍の押

入から、私の床を出して敷いたあとを、一人が蚊帳を、一人が絹の四布蒲團を、明石と紹縮緬の裳に搦めて、蹴出棲の朱鷺色、水色、はら／＼と白昼も透いて重つて正屋へ隠れた、其の後の事なんですか。」

二十七

「二人の婦が、其の姿で、沓脱の笹を擦る棲はづれ尋常に、前の浅茅生に出た空には、銀河が颯と流れて、草が青う浮出しさうな月でせう——蚊帳釣草にも、蓼の葉にも、萌黄、藍、紅麻の絹の影が射して、銀の色紙に山神のお花畑を描いたやうな、其のまゝ其處を闔にしたら、月の光が疊の目、寝姿に白露の刺繡が出来さうで、障子を此方で閉めてからも、暫時幻が消えませんが、二人は最う暗い母屋へ入つたんです。と、草清水の音がさら／＼と聞え出す、其が、抱いた蚊帳と、掛蒲團が、狭い土間を雨戸に觸つて、何處までも、づつと遠くへ行くのが、響くかと思はれる。……

處で、何時でも用あり次第、往通ひの出来るやうにと、……一體土間の其の口にも扉がついて居る。其處と、其から斜違ひに向ひ合つた沓脱の上の雨戸一枚は、閉めないで、障子ばかり。あとは辻堂のやうな、ぐるりとある廻縁、残らず雨戸が練つてあつた。

さて、寝る段に成つて、其のすつと軽く敷いた床を見ると、まるで、花で織つた羅のやうでもあるし、虹で染めた蜘蛛の巢のやうにも見える——

つかと無遠慮には踏込み兼ねて、誰か内端に引被いで寝た處を揺起すと云つた體裁……

枕許に坐つて、密と搔卷の襟へ手を懸けると、冷かつた。が、底に幽に温味のある氣がして成りません。

又氣の所爲で、何うやら、恚う、すや／＼と花が夜露を吸ふ寢息が聞える。可訝く、天鷲絨の襟もふつくり高い。

や、開けると、あの顔、——寝亂れた白い胸に、山蟻が寸點黒いぞ、と思ふと、何故か、此の夜具へ寝るのは、少い主婦の懷中へ入るやうで、心咎がしてならないので、少時考へて居ましたかね。

然うでもない、又どんな事で、母屋から出て来ないと限らん。誰か見ると此の體は、蓋を壁にした本箱なり、押入なり、祕密の鍵を盗まう、とするらしく思はれよう。心苦しいと思つて、思ひ切つて、搔卷の袖を上げると、キラリと光つたものがある。

鱗か、金の、と總毛立つ——と櫛でした。何時取落したか、青貝摺ので、然も直ぐ襟許に落ちて居ました。

待て、女の櫛は、誰も居ない夜具の中に入つて居ると、すやくと寢息をするものか、と考へたくらる、最う其れほどの事には驚かず、當然のやうだつたのも、氣が何うかして居たんでせう。しばらく手に取つて視て居ましたが、

(え、縁切だ！)

と些と氣勢つて、ヤケ氣味に床の間へ投出すと、カチリと云ふ。折れたか、と吃驚して、拾ひ直して、密と机に乗せた時、聊か、蝦蟆口の、これで復讐が出来たらしく、大に男性の意氣を發して、

(何うするものか！)

ぐつと潜つて、

(何でも来い。)

で枕を外して、大の字に成つた、……は可いが、踏伸ばした脚を、直ぐに意氣地なく、徐々縮め掛けたのは……

ぎやつ！

あれは五位驚でせうな。」

「え。」

「それとも時鳥かも知れませんが、ぎやつ！と啼きます……」

可厭な聲で。はじめ、一聲、二聲は、横手の崖に満充ちた霧の底の方に響きました。虚空へ上つて、ぎやつと啼くかと思ふと、直ぐに又ぎやつと来る。

丁度谷底から、一軒家を、環に飛び廻つて居るやうです。幾羽も居るんなら居るで可いが、何だか、其の聲が、同じ一つ鳥のらしいので、變に心地が悪いのです。……凡そ三四十度、聲が聞えたでせうか。

枕頭で、ウーンと呻吟くのが響き出した、其の聲が、何とも言はれぬ……」

二十八

「寝てから多時経つ。これは晝間からの氣疲れに、自分の魔される聲か、自然と耳に入るのぢやないか。

然うも思つたが、然し矢張聞える。聞えるからには、自分でないのは確でせう。

また何うも呻吟くのが、魔されるのは様子が違つて、苦み拵くと云つた調子だ……さ、其の同一苦み拵くと云ふにも、種々ありますが、譯は分らず、然も其の苦惱が容易ぢやない。今にも息を引取るか、なぶり殺しに切刻まれてでも居さうです。」

「やあ〜、どちらの御婦人で。」

「否、男の聲。不思議にも怪しいにも、婦人なら母屋の方に縁はあるが、正しく男なんですものね。」

「男の聲かな、え、それは大變。生血を吸はれる夥間らしい、南無三、其處で？」

「何しろ何處だ知らん。薄氣味悪さに、頭を擡げて、熟と聞くと……矢張り、ウーと呻吟る、其が枕許の其の本箱の中らしい。」

「本箱の？」

「一體、向うへ向けたのが氣に成つたんだが、其にしても本箱の中は可訝い、と能く〜聞き澄しても、間違ひでないばかりか、今度は何です、尙ほ困つたのは、其の聲が一人でない、二人——三人——三個の本箱、どれもこれも唸つて居る。」

「ウーウーウーと云ふ續け状のは、厭な内にもまだしも穩かな方で、時々、ヒイツと悲鳴を上げる、キヤツと叫ぶ、ダァーと云ふ。突刺された、斬られた、焼かれた、と、秒を切つて劃のつくだけ、一々ドキリ〜と胸へ來ます。」

私はむつくり起直つた。

あ、硫黄の臭もせず、蒼い火も吹出さず、大釜に湯玉の散るのも聞えはしないが、こんな山

には、ともすると地獄谷と言ふのがあつて、阿鼻叫喚が風の繞るが如くに響くと聞く……扱は……
……少い女が先刻——

(此處は地獄ですもの。)

と言つたのも、此の悪名所を意味するか。……キヤツと叫ぶ、ヒイと泣く、それ、貫かれた、扱られた……ウ、ウ、ウーンと、引入れられさうに呻吟く。

逆も堪らん。

氣の所爲で、淺茅生を、縁近くに湧出る水の月の雫が點滴るか、と快く聞えたのが、どく〜脈を切つて、其處らへ血が流れて居さうになつた。

さあ、最う本箱の中ばかりぢやない、縁の下でも呻吟けば、天井でも呻吟く。縁側でも呻吟り出す——數百の蟲が一齊に離座敷を引包んだやうでせう、……これで、どさりと音でもすると、天井から血みどろの片腕が落ちるか、ひしやげた胴腹が、疊の合目から溢出さう。

幸ひ前の縁の雨戸一枚、障子ばかりを隔てにして、向うの長土間へ通ずる處——其の一方だけは可厭な聲が未だ憑着きません。お、！事ある時は、其から母屋へ遁げよ、と云ふ、一條の活路なのかも料られん。……

お先達、

と大息ついて、

「……恚う私が考へたには、所説があります。……其は、お話は前後したが、其の何の時でした。先刻、――」

(だつて、山蟻の附着いてる身體ですもの。)

で、しつかり魂を抱取られて、私がトボンとした、……と申しましたな。――其處へ、

(お綾さん、是なのかい。)

と聲を掛けて、貴婦人が、衝と入つて來たのでした。……片手に、あの、蒔繪ものの包を提げて、片手に小な盆を一個。それに臺のストと細い、淺くてばつと口の開いた、ひどくハイカラな硝子盃を伏せて、眞緑で透通る、美しい液體の入つた、共口の壺が添つて、――三分ぐらゐる上が透いて居たのでしたつけ。

(あゝ、それなの、憚りさま。)

と少いのが言ふと、

(手の着かないのは無いやうね。)

と縁の露の映る手で、つツと私の前へ直しました。酒なんですね。

(手が着いたつて、姉さん、食べかけではないわ、お酒ですもの。)
綺麗な齒をちらりと見せたもんですね。其の時、」

二十九

「貴婦人も莞爾して、

(ま、然うね、私は些とも頂かないものだから。)

(あら人聞きが悪いわ。私ばかりお酒を飲むやうで。)

(だつて其に違ひないんですもの、眞個に困つた人だこと。)

一寸寐めるやうな目をした。二人で仲よく争ひながら、硝子盃を取つて指しました。

(さあ、お一つ召上れな、お綾さんの食べかけではないさうですから……しかしお甘いんで不可
ませんか。)

と貴婦人が言つた時は、最う少い方が壺を持つて待つてゐるんでせう。手首へ掛けて蒼い酒に、
颯と月影が射したんです。

毒蟲を絞つた汁にもせよ、人生れて男にして、これは辭すべきでない。
引掛けて受けました。

薫と酔が、ほんのりと五臟六腑へ染渡る。處で大膽に其の盃を、少い女に返しますとね、半分ばかり貴婦人に注いで貰つて、袖を膝に載せながら、少し横向きになつて、カチリと皓齒の音がした、目を瞑つて飲んだんです。

(姉さんは。)

(否、澤山、私は卑いやうなけれども、どうも大變にお肚が空いたよ。)

とお肴兼帯——怪しげな膳よりは、と云つて紫の風呂敷を開いた上へ、蒔繪の蓋を隙かしてあつた。其のお持たせの鮎の鮎を、銀の振出しの箸で取つて撮んだでせう。

(お茶を注して來ませうね。)

と吸子を取つて、杳腕を、向うむきに片棲を蹴落しながら、美しい眉を開いて、

(二人で置くは心配ね。)

と斜めになつて袖を噛むと、鬢の戦ぎに連立つて、袂の尖がすつと折れる。

貴婦人が疊に手を支き、

(お盃をしたのは貴女でせう。)

(ですから、尙の事。)

と言ひ棄てて袂を啣へたまゝ、蓮葉に出ました。

私は憎となつた。

が、此處だ、と一番、三盃の酔の元気で、拜借の、其の、女の浴衣の、袖を二三度、兩方へ引張り、ぐつと膝を突向けて、

(夫人。と遣つた——)

(生命に別條はありませんでせうな。)

卑劣なことを、此の場合、恰も大言壯語する如く浴せしたんです。

笑ふか、打つか、呆れるか、と思ふと、案外、正面から私を視て、

(え、其の御心配のござんせんやうに、工夫をして居ますんです。)

と判然言ふ。其の威儀が正しくつて、月に背けた顔が蒼く、何故か目の色が光るやうで、羅の縞もきり、と堅く引緊つて、くつきり黒くなつたのに、悚然すると、身震がして酔が醒めた。

(え、！)

しばらくして、私は兩手を支かないばかりに、

(申譯がありません。)

で以て恐入つたは、此の人こそ、坂口で手を掉つて、戻れ、と留めてくれた其でせう。

(どうぞ、無事に歸宅の出來ますやうに、御心配を願ひます、どうぞ。)

と方なしに頭を下げた。

(さあ。)

と大事に居直つて、

(それですから、心配をしますんですよ。今の、あのお盆を固めの御祝儀に遊ばして、最う何處へも行らつしやらないで、お綾さんと一所に、此處にお住ひ下さるなら、些ともお障りはありませんけれど、それは、貴下お厭でせう。)

私は目ばかり働いた。

(ですが、あの通り美しいのに、貴下にお願があると云つて、衣物も着換へてお給仕に出ました心は、しをらしいではありませんか。私が貴下なら最う、一も二もないけれど……山の中は不可ませんか、お可厭らしいのねえ。)

と歎息をされたのには、私も吐胸を吐きました。……」

三十

「一寸二人とも言が途絶えた。

(ですがね、貴下、無理にも發程てお歸り遊ばさうとするのは——それはお考へものなんですよ。

……あ、綾さんが見えました。)

と居座を開いて、庭を見ながら、

(よく、お考へなさいまし、私どもも、何とか心配をいたします。)

話は切れたんです、少い人が、いそぐ入つて來ましたから。……

處で、俯向いて居た顔を上げて、其となく二人を見較べると、私には敵らしい少い人の方が、優しく花やかで、口を利かれても、とろりと成る。味方らしい年上の方が、對向ひになると、凄いやうで、おのづから五體が緊る、が、此處が、ものの甘さと苦さで、甘い方が毒は順當。

まあ、それまでですが、私の身に附いて心配をしますと云つたのに、私ども二人して、と確に言つた。

すると、……二人とも味方なのか、其とも敵なのか、どれが鬼で、いつれが菩薩か、些とも分りません。

分らずじまひに、三人で鮓を食べた。茶話に山吹も出れば、巴も出る、俱利伽羅の宮の石段の數から、其の境内の五色の礫、月かなしと云ふ芭蕉の碑などで持切つて、二人の身の上に就いては何も言はず、又此方から聞く場合でもなかつたから、其なりにしましたが、唯ふと氣に留つた事があります。

少い女が持出した、金蒔繪の大形の見事な食籠……形の菓子器ですがね。中には加賀の名物と言ふ、紅白の墨形の落雁が入れてありました。處で、蓋から身をかけて、一面に蒔いた秋草が實に見事で、塗も時代も分らない私だけれども、精巧さは其だけでも見惚れるばかりだったのに、もう落雁の数が少なく、三人が一ツつ、で空になると、其の底に、何にもない漆の中へ、一ツ、銀で置いた松蟲がスーイと髻を立てた、羽のひだも風を誘つて、今にもりん／＼と鳴出しさうで、餘り佳いから、あつ、と賞めると、貴婦人が、ついたした風で、

(これは、お綾さんのお父さんが、此の重箱の蒔繪も矢張り、)と言ひかける、と、目配せをした目が衝と動いた。少いのは又颯と瞼を染めたんです。

で、悪い、と知つたから、其切、私も何にも言ひはしなかつた。けれども何うやらお綾さんが人間らしく成つて來たので、聊か心を安じたは可いが——寝るとなると、櫛の寢息に、追續いた今の呻吟……

お先達、此處なんです。

二人で心配をして遣らうと言つたは、今だ。疾く其の遁口から母屋に抜けよう。が、或は三方から引包んで、誘き出す一方口の土間は、宛然穿穴とも思つたけれども、まゝよ、あの二人にな

ら何うともされろ！で、淺茅生へドンと下りた、勿論跣足で。

峰も谷も、物凄いな真夜中ですから、傍目も觸らないで土間へ迂り込む。

づつと遙な、門へ近い處に、一間、煤け障子に灯が射す。

聞は……彼處だ。

難有い、としつとり、びしよ濡れに夜露の染んだ土間を、びた／＼と踏んで、尤も向うの灯は届かぬ、手探りですよ。

やがて、其の土間の廣く成つた處へ掛ると、朧氣に、縁と障子が、恚う、幻のやうに見えたも道理、外は七月十四日の夜の月。で、雨戸が外れたまゝです。

けれども、峰を横倒しに戸口に挿込んだやうに、靄の蔓つたのが、頭を出して、四邊は一面に濛々として、霧の海を鴉が縫ふやうに、處々、松杉の梢がぬつと顯れた。他は、幅も底も測知られぬ、山の中を、時々すつと火の筋が閃いて通る……角に松明を括つた牛かと思ふ、稻妻ではない、甲蟲が月を浴びて飛ぶのか、土地神が蠟燭點けて歩行らしい。

見ても凄い、早や其處へ、と思つて寝衣の襟を搔合せると、其の目當の聞で、——確に女の——すゝり泣きする聲がしました。……ひそ／＼と泣いて居るんですね。」

「夜半に及んで、婦人の閨へ推參で、同じ憚るにしても、黙つて寝て居れば呼べもするし、笑聲なら興し易いが、泣いてる處ぢや、たとひ何でも、迂濶に聲も懸けられますまい。

何しろ、泣きむと云ふは、一通りの事ではない。氣にもなるし、案じられもする……又怪しくもあつた。ですから、悪いが、密と寄つて、其處で障子の破目から――

其の破目が大層で、此方へ閉つてます引手の處なんぞ、棧がぶら下つて行抜けの風穴で。二小間眞蒼に蚊帳が漏れて、裾の紅麻まで下へ透いて、立つと胸まで出さうだから、覗く處ぢやありません。

屈んで通抜けました。其處を除けて、故々廻つて、逆に小さな破から透かして見ると……蚊帳越ですが、向うの壁に附着けた燈と、對向ひで能く分る。

其の灯を背にして、此方向きに戻つて居たのは、年上の貴婦人で。蚊帳の萌黄に色が淡く、有るか無いか分らぬ、長襦袢の寝衣で居た。枕は袖の下に一個見えたが、絹の四布蒲團を眞中へ敷いた上に、掛けるものの用意はなく、又寝るつもりもなかつたらしい――貴婦人の膝に突伏して、恚うぐつと腕を擱まつて、しがみついたと云ふ體で、其で鳩々と力なさうに背筋を曲つて、

獨鉗入の博多の扱帯が、一ツ絡つて、ずりりと腰を這つた、少い女は、帯だけ取つたが、明石の縞を着たまゝなんです。

泣いて居るのは其です。前刻から多時然うやつて居たと見えて、唯しくく泣く。後れ毛が揺れるばかり。慰めて居さうな貴婦人も、差俯向いて、無言の處で、仔細は知れず……花室が夜風に冷えて、咲凋れたと云ふ風情。

其の内に、肩越に抱くやうにして投掛けて居た貴婦人の手で脱がしたか、自分の手先で拂つたか、少い女の片肌が、ふつくりと圓く抜けると、麻の目が颯と遮つたが、直に底澄んだやうに白くなる……又片一方を脱いだんです。脱ぐと羅の襟が、肉置のほどの好い頸筋に掛つて、すつと留まつたのを、貴婦人の手が下へ押下げると、見る目には苛らしう、引剥ぐやうに思はれて、裏を返して、はらりと落ちて、腰帶さがりに翻つた。

と見ると、蒼白く透つた、其の背筋を搦つて、貴婦人の膝へ押し上りざまに、半月形の乳房をなぞへに、脇腹を反らしながら、ぐいと上げた手を、貴婦人の頸へ巻いて、其の肩へ顔を附ける……

其の半裸體の脇の下から、乳房を斜に掛けて、やア、抉つた、突いた、血が流れる、炎が閃めいて燃えつくかと思ふ、洪と迸つたやうな眞赤な痣があるんです。」

山伏は、大息ついて聞くのである。

「其の痣を、貴婦人が細い指で、柔かにそろ／＼と撫でましたつけ。其さへ氣味が悪いのに、十度ばかり擦つて置いて、圓髻を何と、少い女の耳許から潛らして、あの鼻筋の通つた、愛嬌のない細面の緊つた口で、其の痣を、チュツと吸ふ、」

「うゝむ、」

と山伏は呻吟つた。

「私は生血を吸ふのだと震へ上つた。ト何うかは知らんが、少い女の絡んだ腕は、ひとりで貴婦人の頸を解けて、ぐたりと仰向けに寝ましたがね、鳩尾の下にも一ヶ所、めら／＼と炎の痣。

やがて、むつくりと起上つて、身を翻した半身雪の、褌を亂して、手をつくと、袖が下つて、裳を捌いて、四ツ這ひに成つた、背中にも一ツ、赤斑のある……其の姿は……何とも言へぬ、女の狗。」

「あゝ！」

「驚く拍子に、私が物音を立てたらしい。貴婦人が、衝と立つと、蚊帳越にパツと燈を……少い女は這つたまゝで搔消すやう——能く一息に、あゝ消えたと思ふ。貴婦人の背の高かつたこと、蚊帳の天井から眞白な顔が突抜けて出たやうで——未だに氣味の悪さが佛立つてちら／＼します。

あとは、眞暗、蚊帳は漆のやうに成つた。」

三十二

「何が何でも、其處に立つちや居られんから、這つたか、摺つたか、辨別はない、凸凹の土間をよろ／＼で別亭の方へ引返すと……」

又、まあ何うです。

あの、雨戸がはづれて、月明りが霏ながら射込んで居る、折曲つた縁側は、横縦にかや／＼と人影が映つて、宛然、以前、此の立場が繁昌した、午飯頃の光景ではありませんか。

入亂れて皆腰を掛けてる。

私は構はず、其の前を切つて抜けようと思いました。

大膽だと思ひますか——何、然うではない。度胸も信仰も有るのではありません、が凡て恚う云ふ場合に處する奥の手が私にある。それは、何です、劍術の先生は足が顛へて立縮んだが、座頭の坊は琵琶を背負つたなり四這ひになつて木曾の棧をすらく／＼渡り越したと言ふ、其と一般。

希代な事には、故と胸に手を置いて寝て可憐い夢を平氣で見ます。勿論夢と知りつつ慰みに試みるんです。が、夢にもしろ、如何にも堪らなく成ると、やと叫んで刎起きる、冷汗は浴るばかり

り、動悸は波を立てて居ても、些とも身體に別條はない。

是です！

いざとなれば勿起きよう、夢でなくつて、こんな事があるべき筈のもんぢやない、と斷念めは附けましたが。

突懸り、端に居た奴は、くたびれた麥藁帽を仰狀に被つて、頸窪へ摺り落ちさうに天井を睨んで、握拳をぬつと上げた、脚絆がけの旅商人らしい風でしたが、大欠伸をして居るのか、と見ると、違つた！空を掴んで苦しんでるので、咽喉から垂々と血が流れる。

其の隣座に、どたりと眞俯向けに成つた、百姓體の親仁は、抜衣紋の背中に、藥研形の穴がある。

で、ウン／＼呻吟く。

少し離れて、青い洋服を着た少年の、二十ばかりで、學生風のが、頻りに紐のやうなものを持つて腰の廻りを巻いてるから、帯でもするかと思つて、振ら下つた腸で、切裂かれた臍の下へ、押込まうとする、だく／＼流れる血の中で、一擱、するりと詰めたが、ヒイツと悲鳴で仰向けに土間に轉がり落ちると、其の下に成つて、ぐしやりと壓上げたやうに、膝を頭の上へ立てて、蠢めいた頤髯のある立派な紳士は、附元から引斷れて片足ない、まるで不具の蟋蟀。

最う、一面に算を亂して、溝泥を擲附けたやうな血の中に、伸びたり、縮んだり、轉がつたり、何十人だか数が分りません。――

何時の間にか、障子が透けて、廣い部屋の中も同斷です。中にも目に着いたのは、一面の壁の隅に、朦朧と灰色の礫柱が露はれて、アノ胸を突反らして、胴を橋に、兩手を開いて釣下つたのは、よくある基督の體だ。

床柱と思ふ正面には、廣い額の眞中へ、五寸釘が突刺さつて、手足も顔も眞蒼に黄色い眼を赫と睨く、此の俤は、話にある幽霊船の船長にそっくり。

大俎がある、白刃が光る、筏のやうに槍を組んで、まるで地獄の雛壇です。

孰れも抱着きもせず、足へも縋らぬ。絶叫して目を覺ます……まだ其にも及ぶまい、と見い見い後退りに成つて、ドンと突當つたまゝ、踉蹌けなりに投出されたやうに淺茅生へ出た。

(はあ、)

と息を引いた、掌へ、脂の如く、然も冷い汗が、總身を絞つて颯と來た。

例の草清水がありませう。

日蝕の時のやうな、草の斑に黒い、朦とした月明りに、其處に蹲んだ男がある。大形の浴衣の諸膚脱で、毛だらけの脇を上げざまに、晩方、貴婦人が其處へ投つた、絹の手巾を引伸しながら、

ぐいぐいと背中を拭いて居る。

これは人間らしいと、一足寄つて、

(君……)

と掠れた聲を掛けると、驚いた風にぬつくりと立つたが、瓶のやうで、胴中ばかり。

(首はないが交際ふけえ。)

と、野太い聲で怒鳴られたので、はつと思ふと、私も仰向けに倒れたんです。

三十三

「お先達、其處で二人して交るゝ話しました。——峠の一軒家を買取つたのは、貴婦人なんです。」

是は當時石川縣の或顯官の令夫人、以前は某と云ふ一時富山の裁判長だった人の令嬢で、其の頃此の峠を越えて金澤へ出て、女學校に通つて居たのが、お綾と云ふ、或時繪師の娘と一つ學校で、姉妹のやうに仲が好かつたんださうです。

對手は懺悔をしたんですが、身分を思ふから名は言ひますまい。……貴婦人は十八九で、最う

六七人情人がありました。多情な女で、文ばかり通はして居るのや、目顔で知らせ合つただけなのなんぞ——其の容色で然も妙齡、自分でも美しいのを信じただけ、一度擦違つたものでも直ぐに我を戀ふると極めて居たので——胸に描いたのは幾人だか分らなかつた。

罪の報か。男どもが、貴婦人の胸の中で掴み合ひをはじめた。野郎が恐らく此のくらの氣の利かない話はない。惚れた女の腹の中で、じたばたでんぐり返しを打つて騒ぐ、噛み合ふ、掴み合ふ、引掻き合ふ。

此の騒ぎが一團の佛掌諸のやうな悪玉に成つて、下腹から鳩尾へ突上げるので、うむと云つて齒を喰切つて、のけぞると云ふ奇病にかゝつた。

はじめの内は、一日に、一度二度ぐらゐづゝで留つたのが、次第に嵩じて、十回以上、手足をぶるゝと震はして、人事不省で、烈しい痙攣を起す容體だけれども、何處も些とも痛むんぢやない。——唯夢中に成つて反つ了つて、白い胸を開けて見ると、肉へ響いて、團が動いたと言ひます。

三度五度は譯も解らず、宿のものが回生劑だ、水だ、で介抱して、其で又開きも着いたが、一日數は重なる。段々開きが遅くなつて、激い時は、半時も夢中で居る。夢中で居ながら、あれ、誰が來て怨む、彼が來て責める、咽喉を緊める、指を折る、足を捻る、苦しい、と七轉八倒。

情人が押懸けるんです。自分で口走るので、扱は、と皆領いた。

浅ましいの何のぢやない。が、女中を二人連れて看病に驅着けて来た母親は、娘が不行爲とは考へない。男に膚を許さないのを、戀するものが怨むためだ、と思つたさうです。

迎も宿ぢや、手が届かんで、縣の病院へ入れる事に成ると、醫者達は皆頭を捻つた。病體少しも分らず、で唯まあ應急手當に、例の仰反つた時は、藥を嗅がせて正氣づかせる外はないのです。雑と一月半入院したが、病勢は日に日に募る。然も力が強くなつて、申し掛つて胸を壓へる看護婦に助手なんぞ、一所に兩方へ投飛ばす、まるで狂人。

然うかと思ふと、食べるものも尋常だし、氣さへ注けば、間違つた口一つ利かない。天人のやうな令嬢なんて、始末に困つた。

すると、最う一人の少い方です。——お綾は其通りの仲だから、はじめから姉が病氣のやうに心配をして、見舞にも行けば看病もしたが、暑中休暇になつたので、殆んど病院で附切り同様。妙な事には、此の人が手を懸けると、直ぐに胸が柔かになる。開きは着かぬまでも、三人四人で壓へ切れぬのが、靜に納まつて、夢中で唯謔言を云ふくらるに過ぎぬ。

で、母親が、親にも頼んで、夜も詰め切つて貰つたさうで。肥満女の女中などは、失禮無儀構つちや居られん。膚脱の大汗を搔いて冬瓜の膝で乗上つても、其の胸の悪玉に突離されて、素轉

ころりと倒れる。

(お綾様、お綾様。)

と夜が夜中、看病疲れにすやくと寢て居るのを起すと、譯はない、一寸手を載せて、

(おや、又來て居るよ。……)

誰某だね……と云ふ工合で、其の時々の男の名を覚えて、串戲のやうに言ふと、病人が、

(あ、)

と言つて、胸の落着く處を、

(煩い人だよ。お歸り。)

で、すつと撫で下ろす。——

三十四

「すると、取憑いた男どもが、眉間尺のやうに嚙合つたまゝ、出まいとして、乳の下を潛つて轉げる、其奴を追つ懸けく、お綾が擦ると、腕へ這つて、舞戻つて、鳩尾をビクリと下つて、膝をかけて畝る頃には、はじめ鞠ほどののが、段々小さく、豆位に成つて、足の甲を蠢めて、ふつと拇指の爪から抜ける。其の時分には、最う芥子粒だけもないのです、お綾さんの爪にも堪ら

ず、消滅する。

唯はつと氣を返して、恍惚目を開く。夢が覺めたやうに、起上つて、取亂した態も其のまゝ、婦同土、お綾の膝に乗掛つて、頸に手を擲みながら、切ない息の下で、

(濟まないわね。)

と言ふのが、殆ど例に成つて居たさうです。——お綾が、能く病人の氣を知つた事は、一日も瘵瘳が起つて、人事不省なのを介抱して居ると、病人が、例に因つて、

(来たよ。)

と呻吟く。

(……でせうね、)

と親類内の從兄とかで、これも關係のあつた、——少年の名をお綾が云ふと……

(あゝ、青い幽霊、)

と夢中で言つた——處へひよつこり廊下から……脱いだ帽子を手に提げて、夏服の青いので白い顔を出したのは、其の少年で。出會頭に聞かされたので、眞赤になつて逃げたと言ひます。其の癖お綾は一度も逢つた事はないのださうで。

さあ、醫師は止しても、お綾は病人から手離せません。

何時まで入院をして居ても、些とも快方に向はないから、一旦内へ引取つて、靜かに保養をしようと言ふ事になつた時、貴婦人の母親は、涙でお綾の親達に頼んだんです。

頼まれては否と言はぬ、職人氣質で引受けたでせう。

途中の、不意の用心に、男が二人、母親と、女中と、今の二人の婦人で、五臺、人力車を聯ねて、俱利伽羅峠を越したのは、——丁ど十年前になる——

同じ立場で、車をがら／＼と引込んで休んだのは、矢張、今残る、あの、一軒家。然も車から出る、と瘵瘳けて、大勢に抱へ込まれて、お綾の膝に抱かれた處は……

(先刻、貴下が、怪い姿で抱合つて居る處を蚊帳越しに御覽なすつた、母屋の、あの座敷です。)

ツて貴婦人が言ひましたつけ。

お先達。

三造は酔へるが如き對手を呼んで、

爾時、私は更めて、二人の婦人に慫う言ひました。

(時が時、折が折なんですから、實は何にも言出しはしませんでしたが、其の日、廣土間の縁の出張りに一人腰を掛けて、力餅を食べて居た、烏打帽を冠つて、久留米の紺を着た學生がありました。お心は着かなかつたでせうが、……其れは私です。……)

而して、其の時の繪のやうな美しさが、可懐しさの餘り、今度此の山越を思ひ立つて参つたんです。

お先達、事實なんです。」

と、三造は言つた。

「これを聞いて少い女が、

(而して貴下が、私を御覽なさいましたのは、其の時が初めてですか。)

(否、)

と私が直ぐに答へた。

(違ふか何うか分りませんが、其の以前に二度あります。……一度は金澤の藪の内と言ふ處——城の大手前と對ひ合つた、土塀の裏を、鍵の手形。名の通りで、竹藪の中を石垣に從いて曲る小路。家も何にもない處で、狐が何うの、狸が何うの、と沙汰をして誰も通らない路、何に誘はれたか一人で歩いた。……その時、曲角で顔を見ました。春の眞晝間、暖い霞のやうな白い路が、藪の下を一條に貫いた、二三間前を、一人通つた娘があります。衣服は分らず、何の織物か知りませんが、帯は緋色をして居たのを覚えて居る。そして結目が腰へ少し長目でした。ふらふらとついて見送つて行く内に、又曲角で、それなり分らなくなつたんです。)

——二人は顔を見合せました。」

三十五

「私は又……」

(最う一度は、其の翌年、矢張春の、正午少し後つた頃、公園の見晴しで、花の中から町中の櫻を視めて居ると、向うが山で、居る處が高臺の、兩方から、谷のやうな、一ヶ所空の寂しい土町と思ふ所の、物干の上にあがつて、霞を眺めるらしい立姿の女が見えた。其が何うも同じ女らしい。ロハ臺を立つて、柳の下から乗り出して、熱と瞻る内に、花吹雪がはら／＼として、其切り影も見えなくなる、と物干の在所も町の見當も分らなくなつて了つた。……が、忘れられん、朧夜には其處ぞと思ふ小路々々を徜徉ひ／＼日を重ねて、青葉に移るのが、酔のさめ際のやうに心寂しくつてならなかつた——人は二度とも、美しい通魔を見たんだ、と言ふ……私も或は然うかと思つた。)

貴婦人が聞澄まして、

郎女星
(二度目のは引越した處でせう!)
と少い人に言ふんです。

(物干で、花見をしたり、藪の中を歩行いたり、矢張、皆恠う云ふ身體になる前兆でせう。よく貴下、お胸に留めて下さいました。姉さん、私もう一度緋色の帯がしめたいわ。)

と、はら／＼と落涙して、

(お恥かしいが……)

——と續いて話した。——

で、途中介抱しながら、富山へ行つて、其の裁判長の家に落着く。醫者では不可ん、加持祈禱と、父親の方から我を折つて、お札、お水、護摩と成ると、元々然う云ふ容體ですから、少しづつ治まつて、癩癩も一日に二三度、其も大抵時刻が極つて、途中不意に卒倒するやうな憂慮なし、二人で散歩などが出来るやうになつたさうです。

一日、巴旦杏の實の青々とした二階の窓際で、涼しさうに、うと／＼、一人が寝ると、一人も眠つた。貴婦人は神通川の方を裾で、お綾の方は立山の方を枕で、互違ひに、つい脇枕をしたんですね。

トン／＼トン蹺音がして、二階の梯子段から顔を出した男がある。

お綾が起返ると、いつも病人が夢中で名を呼ぶ……内證では、其の惚話を言ふ、何とか云ふ男なんです。

づつと来て、裾から貴婦人の足を壓へようとするから、え、不躑躅な、姉を惱す、病の鬼と、床の間に、重代の黄金づくりの長船が、邪氣を拂ふと言つて飾つてあつたのを、抜く手も見せず、颯と眞額へ斬付ける。天窓がはつと二つに分れた、西瓜をさつくり切つたやう。

處へ、背後の窓下の屋根を踏んで、窓から顔を出した奴がある、一目見るや、膝を返しざまに見當もつけず片手なぐりに斬拂つて、其奴の片腕をばさりと落した。時に、巴旦杏の樹へ樹上りをして、足を踏張つて透見をして居たのは、青い洋服の少年です。

お綾が、つか／＼と屋根へ出て、狼狽へて其の少年の下りる處を、ぐいと突貫いたが、下腹で、するりと腸が枝にかゝつて、主は血みどれ、どしんと落ちた。

此の光景に、驚いたか、湯殿口に立つた髻面の紳士が、紹羽織の裾を煽つて、庭を切つて遁げるのに心着いて、屋根から翻然……と飛んだと言ひます。垣を越える、町を突切る、川を走る、やがて、山の腹へ抱つて、のそ／＼と這上るのを、追継りさまに、尻を下から白刃で縫上げる。ト頂に一人立つて、此方へ指さしをして笑つたものがある。エ、と劍を取つて飛ばすと、胸元へ刺さつて、ばつたり、と朽木倒。

する／＼と攀上つて、長船のキラリとするのを死骸から拔取ると、垂々と湧く血雫を逆手に除り、山の端に腰を掛けたが、はじめて吻と一息つく。——瞰下す麓の路へ集つて、頭ばかり、う

ようよして八九人、得物を持つて押寄せた。

猶豫はず、すらりと立つ、裳が宙に蹴出を擲んで、踵が腰に上ると同時に、ふつと他愛なく軽と、風を泳いで下りるが早い、裾が未だ地に着かぬ前に、提げた刃の下に、一人が帽子から左右へ裂けた。

一同が、わつと遁げる。……」

三十六

「今は最う追ふにも及ばず、するくくと後を歩行きながら、刃を振つて、

(は、)

と聲懸けると、聲に應じて、一人づつ、どたり、ばたたりで、算を亂した、……生木の枝の死骸ばかり。

何時の間にか、二階へ戻つた。

時に、大形の浴衣の諸膚脱ぎで、投出した、白い手の貴婦人の二の腕へ、しつくり喰ついた若いもの、豫て聞いた、——これは其の人の下宿へ出入りの八百屋ださうで、矢張り情人の一人なんです。

(推参)

か何かの片手なぐりが、見事に首をころりと落とす。拳の刃に、白刃の尖が姉の腕を掠つて、カチリと鳴つた。

あつと云ふと、二人とも目を覺した。

お綾の手に、抜いた刀はなかつたが、貴婦人は二の腕にはめた守護袋の黄色の金具を壓へて居たつて言ふ事です。

實は、同じ夢を見たんださうで、尤も二階から顔を出したのも、窓から覗いたのも、樹上りをしたのも、皆同時に貴婦人は知つて居た。

自分の情人を、一人々々妹が斬殺すんで、はらくするが、手足は動かさず、聲も出せない。其の疲れた身體で、最後に八百屋の若いものに惱まされた處——片腕一所に斬られた、と思つたが、守護袋で留まつたと言ふ。

貴婦人の病氣は、それで、快癒。

が、入交つて、お綾は今の身になつた。

と言ふのは、夢中ながら、男を斬つた心持が、骨髓に徹して忘れられん。……思ひ出すと、何とも言へず、肉が動く、血汐が湧く、筋が離れる。

他の事は考へられず、何事も手に着かない、で、三度の食も欲しくなくなる。

處が、親が蒔繪職。小兒の時から見習ひで繪心があつたので、ノオトブックへ鉛筆で、先づ、其の最初の眉間割を描いたのはじまりで。

顔だけでは、飽足らず、線香のやうな手足を描いて、で、のけぞらした形へ、疵をつける。其も墨だけでは心ゆかず、やがて繪の具をつかひ出した。

けれども、男の膚は知らない處女の、艶書を書くより恥かしくつて、人目を避くる苦勞に瘦せたが、病は嵩じて、夜も晝も茫乎して來た。

貴婦人も、其切り學校はやめたが、お綾も同斷。其の代り寂い途中、立向うても見送つても、其の男を目に留めて、これを繪姿にして、斬る、突く、胸を刺す。……血を彩つて、日を経ると、屹と其のものは生命がないと言ふのが知れる……段々嵩じて、行違ひなりに、ハツと氣合を入ると、卽座に打倒れる人さへ出來た。

が、可恐いのは、一夜、夜中に、或男を呪詛つて居ると、ばたりと落ちて、脇腹から、鳩尾の下、背中と、浴衣越しに、——それから男に血を彩らうと云ふ——紅の繪の具皿の覆れ掛つたのが、我が身の皮を染め、肉を透して、血に交つて、洗つても、拭つても、濃くなるばかりで、褪せさせぬ。

お綾は貴婦人の膝に縋つて、凡てを打明けて泣いたんです。

其の頃は、最う生れかはつたやうになつて、何某の令夫人だつた貴婦人は、我が身も同じに、悲み傷んで、何は措いても、其の悪い癖を撓め直さうと、千辛萬苦したけれども、お綾は、怪い情を制し得ない。

情を知つた貴婦人は、それから心着いて試みると、お綾に呪詛はれたものは、必ず無事ではないのが確で。

今は慙う、とお綾の決心を聞いた上、心一つで討らつて、姫捨山を見立てました。

處が、此の俱利伽羅峠は、夢に山の端に白刃を拭つて憩つた、正しく其の山の姿だと言ふ。しかし此の峠を越したのが、少い人には、はじめて國の境を出たので、其の思出もあつたからでせう。

丁ど、立場が荒廢れて、一軒家が焼残つたと言ふのも奇蹟だからと、其處で貴婦人が買取つて、少い女の世を避ける隠れ里にしたのだと言ひます。

で、一切の事は、祕密に貴婦人が取まかなふ。」

「月に一度、或は二度、貴婦人が忍んで山に上つて来る。其の時は、あゝして抱いて、もとは自分から起つた事と、膚の曇に接吻をする。

が、雪なす膚に、燃え立つ鬼百合の花は、吸消されもせず、しぼみもしない。のみならず、會心の男が出来て、これはと思ふ其の胸へ、グザと刃を描いて刺す時、膚を當てると、鮮紅の露を絞つて、生血の雫が滴點ると言ひます。

廣間の壁には、竹篋で土を削つて、基督の像が、等身に刻みつけて描いてあつた。本箱の中も、残らず慘憺たる彩色畫で、これは目當の男のない時、歴史に血を流した人を描くのでした。」

と物語る、三造の聲は震へた。……

「お先達。

で、貴婦人は、

(縁のある貴下。……此處に居て、打ちもし、蹴りもし、縛りもして、悪い癖を治して上げて下さい。)

と言ふ。

若い人は、

(おなつかしい方だけに、こんな魔所には留められませんが、身體の斑が消えないでは。)

と、しつかり袂に縫つて泣きます。

私は、死ぬ決心をするほど迷つた。

果しなく猶豫つて居るのを見て、大方、其までに話した様子で、後で呪詛はれるのを恐れるために、立て得ないんだと思つたらしい。

沓脱をつかゝると、眞白い跣足で背戸へ出ると、母屋の羽目を、軒へ掛けて、森のやうに搦んだ烏瓜の蔓を手繰つて、一束ねするゝと引きながら、淺茅生の露に膝を埋めて、背から袖をくゝと、我手で巻くので、花は雪のやうに降りかゝつた。

旭が出ました。

驚く私を屹と見て、

(誓は違へぬ！貴下が去つて、他の犠牲の——巢にかゝるまで、此のまゝ此處で動きはしない、心安く下山せよ。)

(さあ、)

と言ふと、一目凝と見た目を瞑つて、黒髪をさげて俯向いたんです。

顔を背けて、我にもあらず、縁に腰を落した内に、貴婦人が草鞋を結んだ。

堪らなく成つて、飛出して、蔓を解かうと手を懸ける。胸を引いて頭を掉るから、葉を引摺つ

て、私は涙を落しました。

(私なんざ構はんから。)

(否、恚うしてまで誓を立てぬと、私は貴下を殺すことを、自分でも制し切れない。一夜冥土へ留めました。お生きなさいまし、新にお存らへ遊ばせ。)

と、目を潤ましたが凛々しく云ふ。

(たとひ、しばらくの辛抱でも。男を呪詛ふ氣のないのは、お綾さんにも幸福です。然うしてお置きなさいまし。)

と、貴婦人が、金剛杖も一所に渡した。

膝さがりに荷を下げて、杖を抱いて悄乎立つのを……

(然やうなら、御機嫌よう。)

(はつ、)

と言つて土間へ出たが、振り返ると、若い女は泣いて居ました。露が閃めく葉を分けて、明石に透いた素膚を焼くか、と鬼百合が赫と紅い。

爾時、峰はづれに、火の矢のやうに、颯と太陽の光が射した。貴婦人が袖を翳して、若い女を庇ひました。……

あの、鬼の面は、昨夜、貴下を罵るトタンに、婦を驚かすまいと思つて、夢中で投げたが——驚いたんです、猿ヶ馬場を出はづれる峠の下り口。谷へ出た松の枝に、まるで、一軒家の背戸の其の二人を睨むやう、潤と眼を睨いて、紫の緒で、眞面に引掛つて居たのです。……

お先達、私は何うしたら可いでせう。と溜息を一度に吐く——

「ふう、」

と一時に返事をして、やゝあつて、

「鬼神に横道はござらんな。」

と山伏も目を瞬いた。

で、其のまゝ誓を立てさせては、今時誰も通らぬ山路、半日はよし、一日はよし、三日と経たぬに、飢もしよう、渴きもしよう、炎天に曝されよう。が、旅人があつて、幸に通るとすると、其は直ちに犠牲になる。自分によくても、身代りを人にさせるは道でない。

心を山伏に語ると、先達も拳を握つて、不束ながら身命に賭けて諸共に其の美女を説いて、悪き心を翻へさせよう。いざうれ、と清水を浴びる。境も嗽手水して、明王の前に額着いて、やがて、相並んで、目を正射に、白い、眩い、峠を望んで進んだ。

雲から吐出されたもののやうに、坂に突伏した旅人が一人。
あゝ、犠牲は代つた。

扶け起こすと、心なき旅人かな。朝がけに禁制の峠を越したのであつた。峰では何事もなかつたが、坂で、躓いて轉んだはずみに、あれと喚く。膝から股へ眞白な通草のやう、さくり切れたは、俗に鎌鼬が抓けたと言ふ。間々ある事とか。

先達が擔いで引返した。

石動の町の醫師を託かりながら、三造は、見返り勝に、今は蔓草の絆も斷つたらう……其の美女の、山の麓を辿つたのである。

七 草

「お嫁さん。」

此の奇抜なる言に、折から燈さへ一寸水を打つたやうな座敷の、面々驚いて是を見れば、當夜上席の縁女、お銀を正面、其の横手の首座、私とは筋向に、ちやくと構へた叔父的である。

これは従弟が祝言の、去年の春、正月七草の夜の事。婿方の媒妁人は、甥の私がうけたまはつた。

處で、敢て註に及ばず、神田正甫、七段の碁の打手は、正しく縁女の舅に當る。舅が縁女を嫁と呼ぶに、聊も不思議はないが、扱て不思議ではないと言つて、一月の朔日起拔けに、

「やあ、元日か。」

は可笑しからう。縁日に社の眞正面を切つて立ち、

「稻荷さん、」

と喚いた日には、毘沙門天と間違へないでも、參詣の群集は吃驚する。

で、今お嫁さんと呼んだのが、恰も三々九度の杯の濟んだまでの場合——尤も内祝言も至極略して、唯形ばかり、雌蝶雄蝶を取交はした新夫婦は、座も席も改めず、袴の藍と緋の下、美しく兩方氣味合で極るを合圖に、隔ての襖を眞中の柱からサラリと開くと、白襟紋着の叔母さんが、ちよきんとした帯腰で屈みなりに、叔父的が羽織袴で頬杖ついた行火炬燵を、向うの隅へ押寄せる、トタンに扇子を挟んで立つ。直ぐに長火鉢の銅壺の中に、お燗酒の徳利が見えようと云ふ、内端な遣方ではあつたけれども、兎に角二世の晴の八疊。

兩人を正面に、叔父的と叔母御が座を並べる。次に私と對向に、婿の兄、家業が違つて別居した、是は或省の中間な處を勤める八の字髻が、洋服の膝を些と氣にして控へた——此の内君が、結立の丸鬘で、背向きに長火鉢の前に、白足袋の新しい裏を見せて、繻珍の腰を浮かせたは、直ぐにお銚子を引上げて、相方に頼んだ出入の商人の娘を助手に、お給仕をしよう誂へ——其の兄の隣座が叔母方の親類二人、どれも老女の、一人は剃立ての天窓、薄鼠、同一色の被布を着た法體、年紀よりは少々しく、丸顔の愛嬌づくつて目が細い。一人は小紋の紋着、四角張つた顔の色蒼黒い、白髪を染めて小さな鬘に結つた、背の高い、肩の聳えた凄いお局、時々嫁の方を後目づかひで、面を背け、襖を睨み、胸を屈み、顔を出す、こゝらが縁女に鬼門の方角。

草 七

向うは今言ふ其の人数で、此方側は、お銀の實父を上席に、續いて嫁方の媒妁人、下宿屋の亭

主で名を六助と云ふ、烟管筒をスポンと鳴し、でげして、唯、然やう、ト又ボンと鳴すのが、ぞべりとして、構へたり。

其の次へ、婿方の媒妁人として、私が控へて、私の弟が相伴役。膳は人なうして座蒲團の前に、あと二ツばかり並んだが、こゝへは程を見て婿の兄の内君、給仕の娘などが来るらしい。

主客ともに先づこれだけの、いづれも席が極つたばかり。彼方此方に、咳、衣摺れの音など二ツ三ツ、一座さすがに寂として、さし俯向いた嫁君の花簪さへ、蝶が来て未だ動かさぬ其の處へ。唐突の、

(お嫁さん……)

一座聳目して、呼吸を詰めれば、叔父的め！指を長く、膳に伏せた猪口を取つて、

「お嫁さん、一つ獻げよう。」

トついと出したが、手近な席に胸を切めた、極彩色の帯の前。

二

傍に、ふつくりと圓く坐つた小造りな叔母御は、困つたと言ふ顔をして、

「お嫁さんは可笑いこと。」

ふ、と照れた目鏡を寄せて、肩で笑ふと、正甫は見返りもしないで、

「何が可笑い、嫁さんだから嫁さんよ。一つ獻げます、受けて下さい。」

唯やつと高島田の顔を上げたお銀は、緋縮緬の搦んだ白い両手を出したが、雛が繰られたやうな覺束ない風、袂が靡くと密と受ける。

心得て、づかゝと来て構へた、婿の兄正一の、彼の内君が、些と離れた處から及腰に注がうとするのを、

「此方へ、」

叔父が引奪つて、

「娶なり早々小姑の酌では不味い。是も敵の片割だ、は、は、俺が自分にお酌をする。」

と瘦せた腕に紋着の折目高く、銚子を口短に取つて注ぐ、ト嫁は熟と身に染みか、前髪挿の筈の、艶照々と震へが見え、眉を隠して猪口を頂く。

時に婿君は額を上げて、黙つて嫂の、其の些と色を作した顔を見て、悪い癖なり許されよ、と目で知らせる、ト口許で莞爾と、嫂は無言の會釋。

叔父的、嫁の方へ向き直つて、
「扱て、お嫁さん、手前婿の親仁です。から役雜ものでな、おまけに今年六十一だ。いや最う御

覽の通り、身代も同然、まるで是れ佐野の馬と言ふ瘦せ方さね。しかし悴から見れば、瘦せたりといへども、五六段男は上だよ。先づ此の、私より五六段下つた野郎だから、積つても知れます。よく世間ぢや鳶が鷹を生む、と云ふが、何ういたして、

とぐいと腕組、仰向いて打笑ひ、

「親鷹で兒鳶ス、何うだい、親馬鹿とも聞えるか。」

と捻向いて肩越しに睨むやうな目をする、叔母は黙りで、唯膝に置いた手を爪探るのが、此の際珠数でも持ちたさうな弱つた體。

「正さん、お芽出たうございますね。」

と、此處で法體の被布が口を入れた。

「然やう、昔の新造が御意の通り、此方は此の上もなく芽出たいが——いや、私も、今夜はじめて逢つて驚いた、嫁さんは美しい。以ての外の別嬪だ。」

と大きく言つて、

「こりや兒鳶には過ぎて居ます。此の容色で、此の妙齡で、私がやうな家へ縁附いて、其の野郎を一生の亭主にする……嫁御に取つて何が芽出たい。え、恚う婆さん連、厭に身眞屑をして、手前勝手にお芽出たの徒黨を組むな！謀叛人めら。は、は、いや、お媒妁人もお聞きなさい。」

あ、見えて、あの尼さんなんぞ、緋の裏の被布で居ます。お守護の中にや先の田之助の使つた小楊枝を入れて居ようと言ふ、大それたものさね。まだく食氣たつぷりで、時々私に色目を使ふ……

「何です、ね、父さん。」

と叔母は、後を言はず、口むぐぐ、

下宿屋の六助、額をつるり、

「結構でげすな。」

と言ふ。

「しかし、御縁だ、足らはぬ野郎だが、何分頼みます。さあ一つ頂戴しよう。や、水臭い、懐紙なんぞ、おつけざし所望です。」

「勿體なう存じます、不束な私、お情に幾久しう、お見棄てなう……」

と口の裡で、お銀が、はつと手を支く時、叔父は手酌で、

「はい、」

と言つたが、さて續けて引かけた。

「これ、お嫁さんに、挨拶しないか。」

と早や赤い顔で顧みる。尤も席へ出るまでに、嫁の車を待つ間、行火で冷酒を煽つたのであつた。

叔母はむつくりと顔を上げて、

「新さん、何とかお言だつけ、と私に言つた。娘の酌の猪口を置いて、

「高島さんの、お銀さん。」

と、私が縁女の名を答へた。

三

「高島善造でございます、申後れまして失禮を。え、はじめで御意を得ますが、

と年紀よりは苦勞に老けた、お銀の實父は、重々しい口を漸と利く。……

「え、家内も罷り出ます筈の處、餘事でございます今夜の事で、何とも恐縮をいたしますが、暮の忙しさから些と其の鹽梅を悪くしましたので。はい、否、大した儀ではございません。今夜とても、宅を出ますに就きまして、娘の身の世話など彼これ仕りました位で。え、臥つて居ります程ではございませんが、恠やうなお席へ、霜げた顔を差出すでもございますまいと、故と

控へましてございます。六さん、貴下からも、よく其の邊を……」

で縞の襯衣で引括つた大きな手を、草臥れた嘉平治の上で頻に揉む。

と未だもの言はぬ六助に先じて、叔父が向うから、一寸手を挙げ、

「いや、追つて杯を持參で御挨拶に罷出ます。間を置いてはお話が和熟せん。先づ、お平にお在でなすつて、御氣根に召飲つて下さい。何か御内寶御加減が悪いさうで、其奴は不可ません。

千秋萬歳の折からお目に掛らいで残念な。」

と正面に半ば目を瞑つて眞面目に言つたが、上さまに眉を開き、

「しかし、お娘御さへ首尾よく御興入下されば、何、御面倒なら、貴下だつて寒いにおいでには

及ばん位で、

些と掠れ氣味の蕭びた聲で、空嘯いたやうに言ふ。一座爲に色めいたが、正甫眉の端も動かさ

ず、

「何も嫁さんが眼目で、我々はこれお互に並び大名、實は當席に用のない身體です。が、空家で

三々九度をするでもないの、下手な尉と姥の書割に夫婦揃つて罷出ました。隣が、ちよい髻の

洋服に、お隣が坊主、續いて般若のお局か。いや、又見苦しいのが揃つたて。いづれも嫁さんに

は邪魔なものばかりだ、喃、おい新公。」

七 草

と私を見越す。

「まあ、然う思つて在らつしやれば間違ひはありませんね。」

隣座の弟と顔を合せ、莞爾笑つたを、じろりと視めて、苦笑ひをして、座中を瞻り、

「あの口をお聞きなさい、あゝ言ふ不心得な奴です。馬鹿な倅と厄介な甥は、天下誰にでも付きものと見えます。はゝはゝ、困つたものだ。が、其の馬鹿な倅の嫁を、厄介な甥が世話をしたにしては、些と此の嫁さんは出来過ぎた。えゝ、新公、お前なり、倅なり、いづれ其の南瓜野郎……」

「南瓜は酷い、叔父さん。」

「いやさ、唐茄子にしる、ぼうぶらにしるだ。お前たちの女房は、長屋の窓か、井戸端か、芥溜の中から拾つて来い。お三どん守つ兒に留めを刺すぞ。其のかはり、近頃の流行だが、あれは不可ん、何さんなど汝が嬌々を様づけにするやうな不了簡を起すな、と言ひつけて置いたを忘れはせまい。倅も望む、他にも異論はないと言ふから、可いか、三々九度をする今夜まで、己は嫁御の名も知らず、其の親御の苗字、御商賣、御住居の邊も能くは知らん。聞いたかも分らんが、覺える用もないから忘れたほどだが、何うも慥う見受けた處が、井戸端で見掛ける柄でない。些と美し過ぎるぜ、これは。何うやら然るべき御臺所だ。」

何、何とか言つた、お嫁さん、お銀さんか。何と何うです、倅の鼻の下が、早や青く伸びて見えませうな。」

「父さんの癖だからね、酒を飲むと最う見境がありません。ね、氣におしでないよ、えゝ、お銀。」と早口の叔母が言ふ。

「お銀、何がお銀だ。生意氣な口を利くな。婆さん、倅には、嬌々を様づけにするなど言つたが、お前に呼棄てにしろと誰が言つた。——べらぼうめ、お銀さんは人様の大切な娘御だ。其の大切な娘御を、そつくり身體ごと下すつたのよ。頂け、難有く思へ。これ、慥う尋常に、聞けば二十一までお育てなすつた、御丹精を考へる。姑婆に呼棄てにされて間尺に合ふかい。」

トぐい飲。

四

「以後もあるこつた、婆さん分つたか。」と又手酌。

七 章
黙つて俯向いた叔母は可いが、尼御前とお局が密と囁く。正一と其の内君、——これは丁ど嫁の親の前に銚子を持つて侍つたのが振返つて、其の夫と、眉で稻妻を通はせた。

實家の親は慌てた状で、急に何か言はうとしたが、頓には然るべき言句も出ないで、口へ手の蓋して、ごほんとかく。

事體穩ならずと見て、媒灼人の六助、矢庭にばたくと手を振りながら、

「や、や、飛んだ御意で、御舅御しばらく。是非、其の、お呼棄てが願ひたい譯で、何うも此の、其の、何でござって、お姑が様づけでは、其處にお隔てがあるやうで。御縁女も嘸お氣遣ひ、な、善さん。」

と隣座の羽織の袖を引くのが、背中を叩くやうな手附になる奴。

「え、何とも恐入つたお言で、手前も御挨拶に困じ果てます、……え、何しろ御覽の通りの不束もの、……其に親どもが届きませんで、躰萬端お話にはなりません。お針とまでも望みます

まい。洗濯女、飯炊と思召しまして、お臺所の隅になりとも唯何時までも差置かれまして、

と善造は平に頭を下げる。ト向うから押上げるやうに胸を反して、

「いや、勿體至極もない。手前どもは土間へ下りても、お嫁さんは座敷に置きます。高島殿お銀

さんは、神田正甫の嫁さんです。が倅正雄には媽々だから、様扱ひにはさせたくない、其の段は

御承知下さい、倅、何うだ。」

と唐突に打附る。

「え、」

正雄は當夜はじめての聲を出した。

「お銀、と一ツぞんざいに遣つて見ろ。」

「……………」

「明かに呼べ。」

「……………」

「事明細に願ひたいな。」

正雄の困するのを取做顔に、六助は羽織の袖をひらくと額を叩いて、

「へ、へ、御親父様は、大分御機嫌で在らつしやいますな。」

「お父さん、」

と正一が洋服の膝を割つて、

「其の當座には、一寸呼棄てにし憎いもんです。ねえ、新さん。」

と私に言ふ。

「鬚髯が惚氣を言ふわ。ねえ、新さん、いや其の野郎が、媽々の味を知るものかい。やすものばかり買ひやがつて、年中素裸のびい〜小僧、ひつてんな處ばかりは兄弟揃つて曾我だ。」

工藤左衛門對手になるが、何うだ一番飲競をするか。いや、意氣地なし、酒にかけても老武者の片手にも叶ふまい。

誰方もお聞きなさい。一昨年も、暮から春へかけて、新の野郎を函嶺から熱海へかけて連出しました、奴が體の可い駈落の尻押さね。——三島越をして静岡に一泊、其の安倍川べり二長町の古き都に來て見ればさ、御酒肴から小物まで、黒板に胡粉で白く、門口にこそは顯したれ。

中位な處へ押上つて、ト先づ對方が二人に不思議はないが、いや、甲乙較べものにならないほど件の奴等の玉が違ふ。處で、此の方、金札大王の暴威を振つて、若くして且つ美しいのを生捕つた。何と其の膝枕に、いきり立つた、此の下谷一番と言ふ大元を載せて見せびらかしの、

(可憐さうだ、取つ交へようか。)

取つかへて遣らうかと言つても、

(否、否、何、)

か何かで、逡巡をする。遠慮さね。一目見ても、鯉と小鱸ぐらゐる相違があるのに、意氣地はない。何爲圖々しく欲しいものは欲しいと言はん——凡て其の了簡方だから、惚れた女を人に取られて、まじく一人で腕組をする、其の姿は。袴が借り物だけに猶寂しい。

まささ、其の借りた袴を打殺して、歸り途におでん爛酒でも煽りつける奴なら話せるが、今に、

誰方も御覽じろ、

(叔母さん、緻になりました。)

と脱いで行きます。いや、其の不心得な事と言つたら。

五

「今夜なども、恚う二人並んだ處を見ては、獨身ものが嘸羨しからう、もしさ、此の嫁さんに惚れて居るなら、遠慮は無え、引攪つて此の場からでも駈落しろ。義理も容赦も浅い中だ、夢中で出刃でも振廻せさ。」

私の胸の切つたほど、叔父の目色は強かつたが、フト心着いたやうに、傍なる春の芍薬、奇しき宵の風情を視めて、

「いや、お嫁さん、貴女はじめ、いづれも氣にしちや不可ません。獨身ものの甥の野郎が世話をした嫁さんだから、忤より前に、何か知己でもありはしないかと、疑つたやうに取られては迷惑します。——そんな、しみつたれを言ふんぢやない。たとひ甥の奴がお古でも、忤が承知なら私は構はん、古を承知するやうに育てた私が、因果だと斷念めるんだね。……」

今言つたのは然うぢやない。恚う二人揃へて見ました、嬉しいにつけて、最う一人此の席へ坐

らせたい、其の正雄の妹が一人あるが、他所へ縁付いて今の處他國に居ます。」

と思ひも掛けず愁然として、

「新、齡から言つても、正より前に、爰へ二人で並ぶんだつけない。」

「叔父さん、」

「何です、ね、こんな席で、」

と尼前とお局が一所に言つた。

「何を、己は男だ、女どもが大勢居て、早く何うにかすべきだつた……が、何にもいはん。いや、誰方も、それ以來、嫁はたとひどんなでも、正が好きなた人を、と思つた。」

處で、御覽の兒鳶です。あれこれは僭上だ、井戸端か芥溜を小春日和に狙つたら、引掛る女もあらうと思つて、上を望むな、空を見るな、と申しに、些と嫁さんが過ぎたやうだ。新公、

「は、」

「こりや何處か、二階の欄干か、四疊半の中からでも連れちや來ないか。」

「もし、」

と此の時、實家の親父善造は、人の好い、面長な額を、燈火に照されながら、

「お舅御、いや、最う二階は二階でも、根津の然る長屋の、家根裏同然な處に親子三人巢を喰ひ

まして内職をして居ります。家内が病氣と申しましても、實は是へ着て出ます、上つ張りがございませんので。手前の此の態ととも、以前、質店をしました時分使ひました番頭の、唯今何うにか遣つて居ります古着屋の品でございましてな。

實は甥御はじめ、此のお媒妁人のお迎も、今晚其の古着屋の奥で、お請けいたしましたやうな次第で——娘の支度ととも、甥御と、それに、御令息……婿様が其の、御心配下さいました。」

と汗を流す親には見えまい。尼をはじめ、……叔父をのけた一座不殘、じろりと正面を見遣つたので、お銀が臉の紅は、霞を拂つて颯と消えた。

「……で、で其の芥溜も同然、其の邊は御安心。」

と、善悪は分かすどぎまぎ言ふ、ト此の時小酔のお媒妁人、手の甲をぺたくとぼんくと餅に搗いて、躍らす如く膝を動かし、

「右同斷、六助も借着でげす。此の女房も、廊下で迂つて怪我とはいつはり。前垂の下は膝抜けのがつくりで、矢張芥溜に縁がござす。凡て、敗亡、一切露顯、チエ、殘念や見顯はされた。だが、もし、御縁女はお受合ひ、盡くお兄弟が御存じで、毛頭御憂慮はございませぬ。」

七
「叔父さん、」

と弟が、これも借着の羽織ながら、氣競つて裾を刎ねたところは、背丈も高く、兄よりは柄が

可い。

「一寸申上げます。何です、お銀さんは、其の、叔父さんの註文通りの……ですね、井戸端や芥溜からぢやありませんが、實は何です、改めて申しますが、草の中から発見したんです。」

「何だ草の中、」

とろんこの目で此方を仰向き、

「馬鹿野郎、藪から棒とは其の事だ。」

と打棄るやうに言つたつけ、——何か聞きたさうでもあり、腕を高く拱いて、

「は、あ、草の中。」

「え、去年……今ぢや最う一昨年の秋、正雄さんと、兄と僕がお供をして、田端から諏訪へかけて、暗の晩、蟲を聞きに出掛けたでせう——叔父さん、貴下が發頭人で。」

六

「發頭人とは何事だ。まるで徒黨を組んだやうに大袈裟に言ひやがる。——何だらう、池の端の蓮玉で一杯遣りながら、道灌山へ蟲聞きにと言出すと、おつとまかせで、お前たち賛成したのは、各々己の懷中に狙をつけて、其の實、伊豫紋あたりで三味線の音を聞くことと心得たのを、眞個

停車場へ連込まれて、お刺に正宗の塚を三本と持たせられて、歎息した時の事だ。怪しからん、不孝な奴等、叔父を何と心得る。」

べろりと舌なめすりをする。話をそらすまいと、正一が軽く手を拍つて、

「謹聴々々。」

と言つて笑つた。

「最う田端の停車場から、坂道を辿つて、道灌山へ上るまでも手探りでしたね、眞暗闇で。上へ出ると、何處か不知火のやうにちらちらと見える燈火で、其でも手許ぐらゐるは見え出したら、早や其處から持つて來た猪口を出して、冷酒をぐいぐいと……叔父さん、貴下からおはじめなすつた。」

蓮玉の下地はあるし、九月の中旬、蒸暑い盛りでせう。吹曝しても酔が早く、皆相應な好い機嫌で。

中でも叔父さんなんざ、叢をよろしくだ。一番がけに、葎簧張へドツサリお突當りなすつたね、……吃驚して二人、廣重が描いた遠花火を見る墨繪の人物のやうに遁出したものがあつたでせう。

七
——やあ、愉快い、世間を亂す山賊退治だ、四天王山入なんてつて、お騒ぎなさる。……其の物音でも大概な蟲は鳴留むのに、時々思出しちや、然う言へば鈴蟲松蟲は何うしたよ、些とも唄は

ないが、これ何處へ隠れた、顯れるッて、洋傘で無暗に草を引拂いたではありませんか。何處の國にか蟲を聞くのに原を薙ぎ立てる者があります、あれは何事でございますか。」

「舊惡露顯、」

と苦い顔色。

「論語を讀め、子は親のために隠すとあるわ、親なき汝等に取りつては、おのれ！」

正一が、

「謹聽々々……」

「何うせ僕たちは、お附合。蟲を聴きたくも何ともない。馬鹿にした轡蟲が、ぐわさ〜と喧ぎ立てるのが、頭痛に響くくらゐなもんです——早く掛茶屋でも見つけて休みたいと思ふのに、叔父さん、貴下は其のひよろ〜の癖に氣ばかり強くつて、無暗と前へお立ちなされるんだから、僕たちも後について踏々踏々、諏訪の見晴へ出て、漸と柱ばかり坊主の圍のやうな掛茶屋へ辿りつくまで、頓て二時半掛つたんです。」

が、其の暗さつと言つたら、あの見晴から空を見ても、螢一つ、星もない。

さあ、若いもの、度胸を据ゑろ、此處が風流だつて、又飲はじめたは可けれども、柱を繋いだ針線に引掛つて突のめる、床板の剥れた穴へ尻餅を置いて悶くのがある、寂として風もないのに、

僕たちばかりが其の騒動。

大分夜も更けたと見えて、あの社の大木が轟と云つて鳴り出しましたね。後ぢや汽車の音が籠つたんだと氣が着くにや着きましたけれども、第一に、臆病な兄が眞前に歸り風を吹かして、まあ心覺えに、あの社の境内を突切つて、あれから谷中へ切れようと言ふ所を……おや、何處へ入つたらう、樹の下だ、草の中だ、何うやら踏ぢやないさうだ、と氣が着いた時分にや、全然方角が分りますまい。

三人が各々、一箱の、然も途中で散々使つた燈火を一本づ、引擦つては、三方へ分れ〜、立つたり、蹲つたり、背中合せになつたり、何處へ灯を突きつけて見ても草ばかり、情ない事には燈火が悉無になつたらうではありませんか。

洒落や申戲事ぢやなくなつて、眞面目に、變だ、可訝いと、足探り、手探り、其も思切つちや伸せません、澤山町を離れないだけに、肥料桶があるか、埋井戸があるか分りますまい。

(野狸だ、高が野狸だよ。)

と叔父さんは仰有つたが、たかが野狸で澤山なんです。

(思ひ切つて突切れ、海坊主の胴中を、さあ港は見えた。)

ツて酔つた勢、貴下が踏出さうとする處は、どうやら一寸一足で、がつくり底の知れぬ崖に見

える……」

七

「危い、お待ちなさいと云つて、留めれば留めるほど、面白づくの意地になつて、高足をお踏みなさる、——此方は、少いものが三人まで附いて居ながら、老人に、」

「意地の悪い事を言ふぜ。」

「謹聴々々々。」

「老人に何ですな、怪我をさしちやあ言譯がないと思ふから、大生酔でも叔父は叔父で。」

「大生酔だけ餘計だよ。」

「謹聴々々々。」

「御馬前に立つてお生命に代らう覺悟で、瀬踏をしますと言つても前へは出さないで、無暗と踏込まうとなさるから、背後から、權の口を緊手と掴むやら、腰を抱くやら、袖を曳くやら、餅に搗いて採抜いて、弱り切つて、」

「叔父さん、確乎なさい。」

「お父さん。」

と宥める聲が、まるで臨終を呼活けるやうに夜陰に響いて、心細くなつて、涙ぐんだ時でした。

ちらりと赤い光の見えたのが、蠟燭の裸火で、眞暗な草原へ、雪のやうに立つた姿があります

——透すと、其の背後が、窓の黒い、小さな小屋で、……其の人の、此方へすらくと歩行いて寄るのが、屋根を離れて来るやうでした。え、僕たちには宛然星の使に見えた、難船の折から燈明臺の女神を拜むやうだつたんです。」

いや、愚弟めが苦々しい言を云ふと、兄は獨で頻に飲む。

「餘り蒸暑さに、寝られぬ晩の、草原の其の騒ぎ。——はじめの内は恐怖かつたが、何うやら暗闇で、路に迷つて難澁な人達らしい、と見かねて起きて出たんだと言ふ。

其の何です、蠟燭の明で見ると、路に踏迷つたも凄じい、四人が捏返して揉んだ處は、三萬方里もあると思ふお釋迦様の掌——蛇の目ほどもない草原で、直き其處が車も通る路なんぢやありませんか。

（果して魅られた、的切野狸だ。）

ツて叔父さん。

其處に立つてる人が人だけに、少いものが、極りを悪がるも構はないで、

（今でも居ますかな。）

なんて、眞面目に話して、

(全く貴方は神佛だ。白衣の観音。)

だの何のツて、酔つてるから……袖なしの寢着のまゝなのを、お氣の毒な、拜んだでせう。それから、其の蠟燭を兄が貰つて、蠟の酒の未だ残つたのを、構はず蟲の涙に草へしたんで、あの底へ其の明を立てたのを僕が持つて、やう／＼漆のやうな樹の中を出ましたね。谷中の坂で瓦斯燈をはじめて見た時まで、些とも風はないから、各々汗は流れても、蠟燭は消えないで點いて居ました。

其の晩の其の火は、正雄さんの身體に附いたお銀さんの魂です。お銀さんは其の時分、お家の活計を助けるために、持主の婆さんに頼まれて、諏訪の茶店に居なすつたんです。」

「謹聴。」

と言ひ懸けた、正一も眞面目に黙つた。

「其の後、また今年……いや、つい去年の秋、其の時は僕は一所ではなかつたんですが、正雄さんと兄を連れて、叔父さん、廣小路へ出なすつた事がありませう。」

兄は何の家だか知つて居ます、ビーヤホールへ入つて、矢張貴下が大生酔。」

「又、酔つたのか、いや、自今禁酒だ。」

さすがの叔父的參つた形……其の癖杯を下へは措かぬ。

「階子段から、雪額を打つて、どたくと通へ出た。三人連——池の端の車帳場と空也の店との、何處か一寸燈明の切目に、かんでらの店を出して、蟲を賣つて居た娘があります。」

眉の隠れる姉さんかぶり、通りへ顔は背けたし、浴衣も着實だつたさうですから、(ほう、意氣な年増が、)

ツて叔父さんは言つたさうです。殊に例の酔眼朦朧ながら、え、貴下には、——」

八

「又其の時も叔父さんは、草薙流でさ、蟲籠に地震を揺らせて、店へどつかりと腕を支いて、(おもしろい、松蟲か。其奴買ふべえ。値段は構はないから鳴くのを寄越せ。)

ツて、羽箒で籠へ移させながら、

(何だか鳴きさうもない。道灌山で管を捲く酔拂ひの松蟲だらう。)

(叔父さんぢやあるまいし、)

と兄が悪口を傍で消す。

(顔ばかり見て居やあがる、蟲を見ろく。)

(姉さん、屹とだらうね。)

と正雄さんが顔を見たんです。

(はい、屹とでございます。)

ツて其の娘は俯向いたんですつさ。

(正、其の籠を持つて来い。)

と叔父さんに言はれた時分にや、其が、何時かの諏訪の森の美しい方だから、正雄さんと兄と、從兄弟同士、思はず袖の下で手を取合つて居たんださうです。」

「は、可厭味な奴等だ。」

と叔父的此處で又苦笑ひ、——正雄と私は、人知れず微笑んで相見たが、と見ると、お銀の黒

髪は、燈火の影が幻の手拭に翻然と成つて、角隠した風情に見える、頸は一際雪のやう。

弟は一息吐いて、

「それですもの、何を何うしたか、買ったのを持つて歸つて、叔母さんにも見せよう、と其處の

茶の間で、

と顧みる。次の六疊に續いた、臺所口の障子には、七輪の火が赫と映つて、暖い湯氣の立つた

中から、女中交りに手傳ひの婆さんなどと、三ツ四ツ、禪で膝つた面が累る。

「買つて来た籠を見ると、中は空です、透かしても振つても、麿竹の影ばかり。

(おや!)

(まあ、お前。)

と叔母さんも拍子抜けをなすつたさうだが、叔父さんは、そんな事は委細構はず、高駈だ。

尤も取違へたのは此方だから、前の不深切と言ふではなし、駒込から廣小路まで、わざく取替へに行くほどのものでもないから、其のまゝに成つたんですが、籠は正雄さんが臺所へは出さなかつた——果して兄の思ふ通り。

何だか残惜いから、空なのを其のまゝ、月の影も中に射せ、と正雄さんが部屋へやの軒のきにかけて、其の晩寝られなくつて、枕まくらをしながら熟じつと視ながめた。

眞夜中頃、さら／＼と風が来て、チン、チンと露つゆが落ちて、チロリンコロリンと、それから鳴く。

誰にも言ひはしなかつたが、秋の末まで毎晩聞いた、と後で僕たちに話したんです——其の筈だと、僕は思ふ。」

と弟は云つた。

「お銀さんは、其時約束した松蟲の籠を袖にして、毎晩根津の家の前に出て居なすつた、商を仕舞つてから、秋の末まで、よくも寐ないで。……勿論其の夜、

(あ、籠が間違つて、)

と氣が着いて、はつと思ふと、もう茫然して、冷かしが來ても、あひしらふ氣も注かないから、啞の蟲賣だ、と思つたでせう。誰も露店へ寄附かない。餘り歸りが遅いから、案じて、お母さんが見に來なすつた頃には、姉さんかぶりの手拭が、何時の間にか、外れて、お銀さんの唇に啣へられて、髪は夜露で洗つたやう、其の籠の蟲が一つ、廣小路の星明に、美しい聲で鳴いて居たつて言ふんですから！」

座は寂とした。

床に掛けた容齋の茶掛の一幅、大橋の擬寶珠に懸けた輪飾の、裏白に白く霞が染まつて、赤々と出た旭の色も、颯と曇つて月のやう、……島田の影が柱へさして、房りとある鬢も、夫戀ふ蟲の姿に見えた。

戸外は風が吹通して、中空から歌留多取る聲。

「お話ばかりまして、
と弟が話を次いだ。

「黄色い聲を出すなよ。」

と言ふ、沈んだが叔父の此の言に、一同は哄と笑つた。

九

「前に、下宿をして居ました縁で、近ごろ僕が所帯——とは言つても其の實、自炊をするやうに成りましてからも小山さん……」

六助にも苗字あるなり。

「今度のお媒妁人が一寸々遊びに見えます。話の序に、當家で正雄さんに嫁さんを探しておいでなさる事を言ひました。尤も豫て叔父さんの御意見通りの井戸端説を唱へたんです。

膝を敲いて、持つて來いと言ふのがある。

以前は本郷の金助町に、大店の質店で高善さん、悪い奴に欺されなすつて、其の後行方が知れなかつたが、つい近い頃、或旦那の供をして日本橋の然るお茶屋へ行くと、帳場に坐つて、帳面をつけて居なすつたのが——此の側の御上席。

(や、高善の旦那)

(こりや、六さんか、お恥かしい。)

とめぐり逢つた。それからのお話で、根津に母子三人で詫住居をなさる。尤も男のお兒は何處かへ奉公をなすつて居て、お内にや嬢さんが。

もとく世話に成つた旦那なり、手札がはりの土産を持つて、其の後お住居へも伺つて、娘さんにも逢ひましたが、御新造が楊枝の内職、一所に燻つて稼いでおいでだ。

お勧めをするのは此のお方——お氣質萬端申分なし、當節柄妙齡の其の御容色で、あゝして困つておいでなさるだけでも、御品行は思ひ遣られる。地獄に佛と言ふ事は、何も救助船が來た時ばかりではない、と言ふんで。

ぢや見合ひを、と話が進んで、僕の許で一暮出ました。——正雄さんは暮方から來て飯を濟ます。燈が點くと、路地の外で、からくと俵が留まつた。二臺、小山さんが案内をして、お銀さんの相箱、これには小山さんの娘が一所に乗つて附いて來たんです。

可笑かつた。僕は落着いて居ましたがね。變なものです、正雄さんが僕の机に凭かゝつて、鉛筆で無暗に、(見合ひ)(見合ひ)と夢中で書いたのは振つて居ませう。

其の筈です。僕も見て驚いたが、いつかの諏訪の森の美しい方ですもの、……些と後れつつ駆けつけた兄は尙ほ驚いた。松蟲の時最一度、念入りに見て知つて居ますから。

でも、酒が出るぢやなし、藏前の羊羹とまでは氣張りましたが、御馳走はそれだけ、お茶ばかり。

り。

しかし、場馴れた小山さんが、いゝやうに應接して、廊下へお顔、と云ふやうな事もなしに、九時頃お開きと言ふ時、お銀さんが結立ての高島田で、ぴつたり手を支いて、

(何うぞ、お願ひ申します。)

ツて言はれたのを、兄は忘れないと言ふんです。……如何にも、おしをらしい、然もぼつと上氣をなすつて、立ちしな上前が狭く、足の白かつたも借着の褌が浅かつたんで、挿込みの銀簪も、僕が見覚えのある下宿屋の其の娘さんの持物で、

「待て、待て、其の娘さんは、何か、お前の情婦か。」

と白眼にして、叔父さんニタリと成る。

「え、」

と言つて談者大にひるむ。

「謹聴々々、」

七 草

「まあ、そんな事は。で、隣く間に話は極まつて、兄から御相談をすると、それでも信用があるかして、叔父さん、叔母さんも御承諾に成りました。

處で、兄が、當方の、——小山さんが彼方の、媒妁人と云ふ事で、愈々結納を持つて行く時に

成つて、兄が受取りに来る、ト叔父さんが、

(種々、世話になる、時に嫁さんの名は何と言ふ。)

ッてお聞きなすつたのにや、思はず吃驚して、ハツと成つたと言ふんです。

蟲の聲に、最う魂が通つて居て、正雄さん、お銀さんは、前の世からの夫婦だぐらるに思込んで居る人ですから、慌てたにもほどのある——自分媒妁人役の、嫁さんの名は第一、家も何處だか見た事なし、親御の商賣まるで知らず、……」

「まあ、」

「何て、まあ——」

と尻前とお局が囁き合つた、が些と聞えよがし。

十

「兄は其の時吐胸をついて、此の質だから蒼く成つたが、一生の智慧を振つて、

(戸籍は凡て弟の方が掛りです。)

は苦しいでせう。……

叔父さんだから其でも通つた、——で、結納は、と云つたが、根津のお宅は知らないから、風

呂敷包を引抱へて、小山さんの内へ出向いたもんです、其處へ行くのも兄は最初。萬事松蟲の聲

……と御承知下さい。

如何に何でも、たとひ借着にしろ、紋着袴で居るものを、小山さんの方でも又根津の屋根裏へは遣はせません。——處で、結納は途中で小山さんが預りました。又此の人が借着の影間。」

「いや、爆裂弾。」

と言つて、六助興覺顔。

「最一つ弱つたのは、間に叔母さんから、

(荷物のないは承知だが、風呂敷包でも来るのかい。)

これに又大凹み、風呂敷包も何にもない。お銀さんは着のみ着のま、。

一寸申上げますが、兄は女房が前垂がけで、

(今晚は、)

と臺所から入ると、もり蕎麥で祝言と云ふのを理想にして居るんですから、それで事は濟むものどと心得て居た處、——叔母さんの一言に面くらひ、正雄さんと額を押着けて、……何處を何う工面をしたか、……勿論、叔父さんと叔母さんからも、ものは出たらうと思ひます。お銀さんの今夜の曠着と、風呂敷包が出来たんです。……

一體、年の中にお儀式をと言ふのですが、押詰つて支度が出来ず、それに又、丁ど幸ひ、秋と春とは違つても、松蟲の思出、と七艸の今夜を、兄が願つて選んだのです。これで萬端洗ひざらひ、——何にも言ふ事はありません。」

「飛だ狐の嫁入だ、と思ふ方はお思ひなさい。」

と嫁を見た私は居直つて、

「顔をお上げなさい、お銀さん、私たちがついて居ます。」

「む、狐の嫁入おもしろい！」

と叔父は嫁の前をづつと来て、私に向つて、どかと胡坐で、

「俺らそんなのが大好だ。よく、お前たち世話してくれた。」

「全く縁ですな。」

と洋服は未だ膝を崩さぬ。叔母は時に目を上げて、お銀の容子をじろりと視める。

「芽出度うげす、お芽出度い。」

と、六助はふらくくして居る。

尼前とお局が、此方同志は、と膝を突合はせるやうに横向に坐り直つて、

「よくして貰はねばなりません。」

「當家のお嫁になんなすつて、ほんに幸福な娘さんだ。」

「何を、」

と肩越に叔父が見向いた。

「何を言やがる、狸婆あ！」

チヨと舌打で、ぐたりと手を支き、胸を捻つて首を据ゑたが、

「八百比丘尼妙椿め。腥の折を攫つて、可い加減に最う歸れ。以來、手前たちが寄つて集つて、

嫁のあらを搜すんだ。氏の素性のと碌でもねえ、何だ尼茶尼ちやねえか。御華族、御高家へ出入

りをして茶の湯活花を教へるツて、汝がお大名の氣で居やがる。大事な嫁を蔑みやあがつて、幸

福な娘さんだ、——氣に入らねえ言を云ふ。

よくこんな内へ嫁てくんなすつた、難有えと何爲思はん。——慙う、こゝに居る此の甥と、死

んだ娘との仲を裂いて、無理に従何位とかへ縁づけたも、手前ださうだ。媽々も媽々だが、媽々

は媽々よ。妙椿汝が狸だぜ。

慙う新、堪忍してくれろ、俺ら稼人だ、然も出商賣だ、何にも知らねえ。」

と叔父が手を取つた時、弟が、密と私の背を撫でた。

「情のねえ俺たちの兒とも言はねえで、正に、よく嫁を世話してくれた。茶汲結構、蟲賣結構、

狐の嫁入愉快い。嫁が、ちごくなら尙妙だ。」

十一

「いや、お媒灼人、お聞きなさい。先刻、これへな、貴下方が車を並べてお乗込の時、かたりと桿棒が式臺へ着くと、どの車夫か、聞えよがしに、

(屋根裏の銀簪が、好い鼠に引かれた。)

と言つたつてね。玄關裏に待ち構へた尼めが頭を掉立つて、裙ふわで、驅けて参り、行火に居ました私の耳を引張つて囁いた、——御合點かい。

私の耳へ入れるやうでは、一家觸れたに相違ない。——處で、奴等の席へ着いた不機嫌さ。手前媽媽々などの佛頂面を御覽じろ、尤も嫁を娶るに荷はあるか、と聞いたさうな。變つた鳴聲をする——こりや別です、が揃つて何の面も氣に食はん。

何が何だ、正が惚れて、甥が世話をした婦、狎でも私は構はん。

又何奴も、車夫風情の悪口を聞いて、火が出るやうに騒ぐ癖に、兒や甥を何故信せんのだ、水臭さが我慢出来ねえ。

其の耳こすりをする最中、嫁さんを迎へて歸つた、甥の奴が驅込んで、ぼろ隠しの屏風の前に、

そはくする悴の肩をたいたわ、持ちつけぬ扇子をぶら下げながら、

(綺麗だ、お驕り。)

と言ふ罪の無さ。頂戴ものの被布よりか、借着の袴は私あ可愛い、何の仇に、悪いと知つて世話をしよう。

屋根裏の銀簪、職過ぎます。

尼も、武家奉公の一日も勤めたらう——車夫が、悪口を吐くと聞いたたら、

(黙れ、當家の嫁御を、)

と、何故あの承塵の槍を外さんのだ、襟元につく野替間婆め。

狐の嫁入りに異存があるか。屋根裏の銀簪が何うしたよ、内の奴等。」

「もし、」

と善造は聲を震はし、

「其は私も聞きました、これへは首の座へ直りました心持、家内も蟲が知らせましたら、嘸今頃は癩を惱んで居りませう、貧はすまいものでございます。」

と鼻をかんで差俯向く。

ト座の眞中に蔓こつた叔父の姿は威儀を正して、善造の前にひたりと坐つて、

昭和十六年八月十日印刷
昭和十六年八月十五日發行

鏡花全集第十一卷

(大森製本)



著者	泉鏡太郎
發行者	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄
印刷者	東京市下谷區二長町一番地 井上源之丞
印刷所	東京市下谷區二長町一番地 凸版印刷株式會社

發行所

岩波書店

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

電話九段(33) 一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

丁落・丁亂不等完全品なありしりた直接申出さ いお替致すま

「御心中御察し申す、…：兒の可愛さは御同然、私が引受けました。御覽の通り届きませんが、誓つて嫁御に寒い思、餓い思はさせません。御心配御無用です。——最う取る年紀で、倅に嫁でも貰つたら、隠居をと存じたが、あゝ、倅や甥が出金合つた曠着をと言ふ御斟酌、襦袢の下に木綿の襟の肌着したのを見ましてから、佐野の瘦馬、もう一働き、と袴に支いた、腕を押へて、

「やがて里開きの頃までには、打合はせの帯でも拵へて、水際立つた女房ぶりを御覽に入れる。御案じないやう、お内方にも芽出度く御傳へが願ひたい。御持病にお癪氣が…：あゝ、嘸、御心勞。」

と目を瞑ると、善造は震へながら、はらくと落涙した。時に、内輪に美しいお銀の姿は、正面に見るに忍びなかつたが、鴛鴦の衾にやがて差向ひになつた時、懐紙の間から、園女が春の莖のやう、秋の蟲の悄れた姿を取出して、御胸の情に温まらば、頓て蘇生らむ此の蟲とて、肌身離さず持つた由。——可懐い初言葉を、私も附添つて聞いたのである。





